※内容的にHTML版では読みにくい可能性もあるので、PDF版を用意しました。当初はHTML版をメインにする予定でしたが、今後はPDF版の方が最新版になることもあります。どちらが最新版かは、PDF版ではページ最上部、HTML版ではページ末のタイムラインでご判断下さい。なお、注記番号等に多少不備があるかも知れませんが、次回改訂で修正しますので、ご容赦ください。

(2016.12.15)

本論に入る前に

補足説明:何を・どう批判するのか?

安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。

(マルコ 2:27)

本論に入る前に、誤解を避ける意味でも、ここでいくつか説明しておきたいことがある。

本章の内容は当初「怖れに根ざした信仰」の論考内に組み込んでいたものだが、文章も長く、本論からもかなり逸脱する内容であったため、新ドメイン移行に伴い、いったん序論部の補説として独立させた後、内容を加筆・改編の上、序文の補説的な章として独立させることにした。ただ本章であつかった内容のうち批判の意義に関する文章は本サイトの全体にも関わる内容であるため、本来はもう少し徹底的に論じたいテーマである。そのため、最近さらに内容を改変の上、その項を独立の論考としてアップした。

1:キリスト教および特定の教派の攻撃が目的ではない

わたしは本サイトのタイトルを「聖書信仰を問いなおす」(ただし、これはあくまで暫定的なサイト・タイトルであり、適切なサイト・タイトルが決まり次第変更したいと考えている)としたが、だからといって必ずしも「聖書信仰」そのものを否定したいわけではない。キリスト教やその信仰を否定したいわけでもない。誤解する人がいるかもしれないので、まずここで詳しく説明をしておくことにする。

(1-1)キリスト教の攻撃が目的ではない

まず第一に、キリスト教に対して批判的な考察をするからといって、わたしは何もキリスト教一般を――キリスト教に違和感をいだく多くの非キリスト教徒がするような意味では〔補説 1-1〕――攻撃するつもりはない。いくら批判的な見解を持っているからといって、福音派や聖霊派の教会はすべて間違っているなどと言うつもりはないし、そんなことは考えてもいない。福音派の教会でよい教会がたくさんあることも知っている。実際わたしの知人にも、今は付き合いがないものの、福音派を含む保守的なキリスト教会の教会員の方が何人もいるが、その多くは人間的にも立派な方だった。問題は、ゆきすぎた福音主義とその立場による聖書解釈が、結果的にキリストの精神からの逸脱、たとえば「信仰による人間疎外」[*1] といった事態を生み出しかねない、ということである(これはむろんリベラルな立場の教会に対しても言えることである。いや、それはプロテスタントやカトリックに限らず、キリスト教会のすべてにわたって言いうることなのである)。そのような問題を福音主義的なキリスト教会が生み出しやすいということは[*2]、しかし、ひとえに福音派や聖霊派の教会だけの問題ではない。それは、禁欲的なピューリタニズムを中心としたプロテスタント教会が内にひそめていた問題(それは古代教会以来、カトリック教会内においても内に孕まれていた問題でもあると言えよう)が、現代において――特に福音主義的なキリスト教会において――如実にその姿を現わしつつある、ということなのである。わたしはそのように考えている(プロテスタンティズムが孕む問題点についての考察は以後の各論において論じる予定である)。

補説 1-1 :一神教と多神教双方による一方的な非難

きちんと読んだことはないのだが、梅原猛氏の主張などがその代表的なものだろうと思う。それらの主張には耳を傾けるべきものも多々あると思うが、中にはかなりひどいものもあるようだ(もっともそれらにしても仏教系の知識人などがイスラムやキリスト教などの一神教に対してどのような偏見を持っているかの事例としては多少参考になるかもしれない)。これらは、大概が一神教を「排他的」ないし「非寛容」として一方的にこれを「非難」(批判というレベルには達していない論難が多いため、この表現を用いる)ないしは「断罪」するのが通例である(昔のわたしも多少それに近かったことをここに白状する)。ただわたしは、それらの一神教批判がすべて間違っているとは思わないものの、彼らの批判は仏教なり神道なりに対する自己批判・自己反省は一切ないことが多いことも事実である。残念ながらここでその問題を詳しく論ずることはできないが、わたしの批判はそのような一方的なものではない――少なくともそのような批判は行なわないよう日頃から心がけているつもりである。

その一方で、先の主張に対して一見矛盾した発言に聞こえるかもしれないが、この場を借りて、どうしてもコメントしておきたいことがある。ここで本格的に論ずるべき事柄ではないかもしれないが、わたしには、これら多神教信者側からする一神教批判に対するクリスチャン側か

*1 詳しくは「聖書に名を借りた支配」を参照。

*2 詳しくは、上記「聖書に名を借りた支配」を参照。

らの「非難」にも疑問を感じる点が少なからずある、ということである。

多神教信者からする一方的な一神教批判にしても、これにただ腹を立てるだけで、その一方で自分たちが今まで二千年近くにわたって他宗教をこれまた一方的に非難し、「異教徒は地獄に堕ちる」などと言い募り（特にカトリック教会および一部のプロテスタント教団から「今は違う」という反論があるかもしれないが、それも第二バチカン公会議以降、たかだか 50 年程度の変化でしかないことを忘れてはいけない）、日本においては仏壇などを焼いてきた「過去」を失念しているとしたらどうか。これはかなり問題だと言わざるをえないと思うのだ。「火のないところに煙は立たない」という俚諺もあるように、彼ら多神教徒のキリスト教に対する非難にしても、元来は自分たちが散々他宗教を誹謗してきたことに対する彼らの「反発」から来ているという側面も見逃すことはできない。これはわたし自身がそうだったからはっきりとわかる。そのことを忘れている、あるいは知ろうともしない――いや本当に知らないのかもしれないが――ならば、それはいささか身勝手にすぎはしないだろうか。もとより仏教を代表とする日本の宗教の側にもキリスト教に対する一方的な攻撃や時には迫害もあったことは事実だし、これはわれわれも深く反省せざるをえない事柄である。しかし、くりかえすが、自分たちに対する批判や攻撃ばかりに目を向けて、自己が他宗教に対して払ってきた無礼な態度を反省する視点すら持たない、持とうともしないと言うのであれば、それもまた問題だと言わざるをえない。それでは一方的な非難だとのそしりを免れないし、よくて水かけ論にしかならない。お互いが他者に対してこのように身勝手で傲慢な姿勢を持ち続けるかぎり、そこには真摯な対話の精神のカケラも生まれはしない。仏教徒に代表される多神教徒も、一神教に属するキリスト教徒も、ここはお互いに他者の視点をも考慮してものを見るよう心懸けるべきではないだろうか。わたしは今そのように思うのである。

(1-2) 聖書カルト批判が本サイトの目的ではない

次に、わたしは本サイトで必ずしも「聖書カルト」を問題にしたいわけではない。

たしかにわたしは、「聖書に名を借りた支配」（次文書）という文章の中で「信仰による人間疎外」の極端な例として聖書カルトの問題を取り上げはしたが、これはわたしがこの方面の話題にたまたま詳しかったからにすぎない。わたしはカルト化した特殊な教会のみを本サイトにおける批判対象にしているわけではなく、本サイトにおける批判的考察の対象は、あくまでもプロテスタンティズムを中心にキリスト教全体にわたる予定である。それだから、「このサイトでの批判は通常のキリスト教会とは関係ない事柄で、自分たちとは関係ない話題だ」とは思わないでほしい[*1]。いずれにしても、破壊的カルトに限らず、「偽造宗教」は相変わらず世にはびこっているし、通常の宗教教団における「信仰による人間疎外」もその跡を絶たない。だから、これは宗教界全般にわたる問題でもあるのだが、キリスト教を批判的に見直す

*1 上記「聖書に名を借りた支配」中の「キリスト教ならばすべて正しいか？」の項を参照。

ことを目的としている本論において特に取り上げた次第である。

「聖書の御言葉」を使った支配から自由になるためにも――聖書カルトに限らず、これはどのような教会、あるいはすべての成立宗教においてもそうなのだが――ここで述べている批判的アプローチはわれわれにとって避けて通れない重要な作業となる。それだから、一般の教会内における「信仰による人間疎外」からの自由はもちろん、霊の言(ことば)で書かれた聖書の「真意」に従って正しい信仰(姿勢・態度)を貫くためにも、クリスチャンは、聖書といえども――いな、《聖》書だからこそ――これを相対化して自分の頭や心で読み解いてゆく必要がある。自分の所属する教会が聖書根本主義の立場を取るにせよ、そうでないにせよ、聖書ないしは聖書の絶対視からの自由、言いかえれば聖書ないし聖書信仰の相対化〔注 1-1 〕が必要となるのである。わたしはそのように考えている。もっともその相対化の作業には当然のこととして批判的なアプローチが含まれるため、わたし個人としては聖書に対するリベラルで批判的な(対話的)アプローチを重視する[*1]次第である。

注 1-1 :相対化とか客観化いう表現を使うと、それが単なる聖書否定、信仰否定の議論にすぎないと否定的に捉える向きが多いだろうが、もとよりわたしにそのつもりはない。その誤解を解くべくここで詳しく論じている余裕がないのは残念だが、このことに関しては後日機会があれば詳しく論じたいと考えている(わたしとしては、「客観化」よりは「相対化」の方が表現として適切だと思うので、今回あえてこの表現を用いたが、場合によっては「客観化」の方が適切な場合もあるだろうと思う)。ただ、ここで多少簡単なコメントをしておくと、「相対化」とは、自分と対象との間に「距離を置くこと」だと言うことができる。ある人が何らかの権威ある対象を心理学的な意味で同一化(同一化ないし同一視とは、臨床心理学における主要な防衛機制の一つである)した場合、特にそれが信仰対象の場合、その人が健全な信仰を生きているとは間違っても言えないだろう〔健全な信仰に関しては次文書の「未熟な信仰と成熟した信仰」の議論を参照〕。それは実質的には偶像崇拝でしかない(その信仰対象がたとえ唯一の神であったとしても、主体的な意味でその人にとってそれが真の神でないのならばそれは偶像にすぎない。ここでは詳しく論述しないでおくが、神殿で祈ったパリサイ人と取税人は、そのどちらもが同じイスラエルの主なる神に対して祈ったにもかかわらず、取税人のみが神のみ前に義とされたのである〔ルカ 1 18: 9-14 〕。このことからも、信仰対象が客観的にどのように正しい存在であろうと、人間がこれに主体的に正しく関わらないかぎり真に正しい神を礼拝したことにはならないことがよくわかるだろう)。そのような場合に、何らかのキッカケでその対象と距離を取り、その対象との同一化を解消することができたとすれば、その人はそのとき初めて真の信仰を得ることができたとも言えるのである。わたしの場合で言えば、わたしは自分の信仰する宗教に対してもこの相対化を過去に行なったことがあるし、その相対化の作業のおかげで現在も信仰を維持することを得ている。しかしながらこれは、わたしの信仰が新宗教だから必要になった作業では

*1 批判の意義等については後述第 3 節他を参照。

必ずしもない。伝統ある既成宗教、たとえばキリスト教であろうと、あるいは仏教であろうと、たとえどのような信仰であっても、現代においてこれは必要欠くべからざる作業である。わたしはそのように信じている。

(1-3) 自分の信仰上の枠組みをもってキリスト教を批判することが目的ではない

誤解される向きも多いと思うので、ここでコメントしておくが、わたしは自分の信仰上の立場、特にその教義や教条をもってキリスト教を批判するつもりはない、ということである。何となれば、それをすることは、わたしが信奉する宗教の教義に照らして、わたしが個人的に違和感をいだくキリスト教を一方的に断罪することにもなるからである。序文でも述べたように、わたしの課題(テーマ)が「何故(なにゆえ)にして」ではなく、自分史的な「如何(いか)にして」の語りであればまた違ったアプローチもあっただろう。けれどもわたしの関心は、その「理由(なにゆえにして)」、すなわち「わたしは何故にしてキリスト教信仰を得るに至らなかったのか？」にあるのである。大変な作業になることは重々承知しているが、わたしはこの問題(テーマ)をキリスト教の教義や歴史にまでさかのぼって考察したいと考えている。そういった次第で、これは先にも(前章序文)簡単に述べたことだが、ここでは自分の信仰については必要最小限の言及にとどめ、詳しくその内容を云々するつもりはない。キリスト教に対してここでわたしが批判を展開する時も、自分の宗教が掲げる教義教条等は脇へおいて考察してゆく所存である。

ただ、誤解のないよう申し添えて述べておくが、わたしがここで自分の宗教を規準にしてキリスト教を批判するつもりはないと言っても、それにはある限界があるということである。それというのも、わたしが現在信仰している(自覚的な)宗教と、その宗教の教義教条を受け入れる前にわたしが無意識に持っていた(非-自覚的な)個人的な信念ないし信条とは必ずしもイコールではないからである。その両者はもちろんまったく別のものではない。けれども、この両者にはある程度の違いがあるのだ。多少わかりにくいかもしれないが(わたしにも説明が容易ではない)、若い頃にわたしが得た信仰は、それよりさらに幼い頃から培ってきたわたしの個人的な性向ないし心理的な傾向(それはわたしが無意識的に持っていた、あるいは無意識のうちに形成されたわたしの個人的信条だと言ってよい)によって必然的に得られたものなのである。それは言い方を変えれば、わたしはわたしにふさわしい宗教(信仰)に神によって導かれたのだと捉えることもできる。事実わたしはそのように信じ確信している。それだから、個人の信仰上の立場なら脇に置くことも可能ながら(事実ここに限らず今までそうしてきた)、しかし、この前-信仰上の立場だけは、これを相対化すること(脇に置く)はできない。これはわたしの生き方にも関わることなので当然だが(いや、それは誰にとっても同じであろう)、それはしてはならないことなのだと思っている。そんなわけで、そのわたしの基本的性向ないし気質から形成されるかぎりでの、わたしの根源的かつ前-信仰上の立場においてキリスト教に対する批判を展開してゆくことには変わりはないことをここに改めてお断わりしておく次第である。

(1-4) よく知らない対象の批判はあまり有意義とは言えない

批判の中心はキリスト教プロテスタンティズム

先にわたしは、プロテスタンティズムを中心にキリスト教全体にわたる批判を行ないたい旨を述べた。このことに関して少し補足すれば、わたしは東方正教会に関しては何も知らないに等しいので、考察の対象に上げるのはあくまでも西方キリスト教会に限られる。もっともカトリック教会に関しても大して詳しいわけではないので（カトリック教会に関してはその長所はそれなりにわかるのだけど、その問題点になると全くうとい、だから批判そのものが不可能なのである。もちろん十字軍の蛮行など通りいっぺんの批判は誰にでもできるけれど、それを行なっても個人的にはあまり意義を感じない）、当然の結果としてその批判の矛先はプロテスタント教会に集中することになる。ただしここでお断わりしておくが、プロテスタンティズムを中心に（西方）キリスト教を全体的に批判の対象とするとは言っても、やはりそれが特定のキリスト教の立場に限定されざるをえない。その特定の対象とは、具体的に言えばカルヴィニズムであり、さらに現代のキリスト教（一般）に関しては聖書根本主義的な立場のキリスト教に対する批判が目立つだろうことは否定できない、ということである。

よく知っている分野だからこそ有効な批判が展開できる

そのことに関連して、多少余談ながら、「批判対象」ということに関してここでひと言コメントしておきたい。

わたしは、上で聖書カルト以外の実際の教会での事例については基本的に言及しない旨を述べたが、それは、詳しく知らない分野に対しては安易に批判はできない、よく知っている分野だからこそ批判することも可能となるからである。これはわたしのスタンスでもあるのだが、よく知りもしないことを批判対象にするすることにはもともと無理がある、よって、そのような批判はできるだけ避けるべきだと考えている。よく知りもしない事柄を批判しても、それはせいぜい「非難」にしかならないし、そのような安易な批判には建設的な意義を認めることはできない。ちなみに、これにはその批判対象を知識として把握しているという面もあるが、それに加えて感覚的にもその対象をよく理解している必要があろう。そうでなければ批判対象に対して主体的なコミットメント[*1] などできはしないからである。だから、キリスト教を問題にすると言っても、その具体的な批判対象は先にも述べたように限られたものとならざるをえないわけである。

知らないなら知らないなりの批判の仕方がある

ただし誤解してほしくないのは、わたしが上記のように述べたからと言って、必ずしも「よく知らない分野に関しては口をつぐめ」と言っているわけではない。ましてや、「当事者でない人間は黙っていろ」などと言いたいわけでもない。よく知らない分野であれば、あるいは部外者であれば、そこで何が問題点となっているかを的確に認識することすらできないだろうし、そもそも批判など不可能なはずだ、ということが言いたかったにすぎない。

しかしながら、それでも何事か批判するという場合は、事実誤認も当然それなりに多いだろうが、そのような意味での知識の多い少ないに関わりなく、その対象に対して何らかの違和感なり疑問を感じているからに相違ないと思うのだ（それすらないのならば、それは単なる言いがかりにすぎない）。「火のないところに煙は立たない」と言われるようにいう俚諺もあるとおり、何らかの違和感なり疑問をいだくという時

*1 詳細は次章の議論、特に「対話的コミットメントとしての批判」の項を参照。

点、その人にはその対象に対する何らかの“感触”というものが多少でもあるはずだ。その違和感なり疑問なりを率直かつ誠実な態度で表明することはお互いにとって意義がある行為だと思う。そこで表明した内容が間違っていれば当然反論されるだろうが、それに対して当人は誠実に応対してゆけばよいだけのことである。そのやりとりの中で、訂正すべきは訂正し、それでも拭えない違和感なり疑問点が残るのであれば、それに対してさらに適切な表現を与えるべく――お互いに、あるいは自分の中で――対話を重ねてゆけばよいのである。

いつも思うことだが、知らないなら知らないなりの批判の仕方があると思う。それには、「自分が知らないこと(あるいは間違っていること)もある」という謙虚な気持ちを失わず、自分が知っている範囲の知識でもって、他者に対する敬意を失わず、あくまで誠実な態度で対話を続ければよいのである。そういったやりとりの中で自然と対象に対する知識も増え、こちら側に一知半解な見解があればこれが正されてされてゆくことになる。正直に言えば、わたし自身プロテスタンティズムに関しても知らないことは山ほどある。それでも、こういった精神で、一方的な非難にならぬようキリスト教について学び、かつ対話してゆく所存である。わたしも時に人からキリスト教に詳しいと言われることが多い(その中にはクリスチャンも含む)が、その知識も事実そのようなやりとりの中で学び、自然に増えてきた知識なのである。

2:わたしが拒否するキリスト教はどんなキリスト教なのか?

上記と関連して、ついでながら二つ三つコメントしておきたいことがある。

それは、それではわたしはキリスト教の何を・どのように批判しようとしているのか、ということである。

(2-1)リベラルな聖書学の立場を信奉しているわけではない

まず誤解してほしくないのは、わたしがいくらリベラルな聖書学に親近感をいだいているからといって、必ずしも聖書学者の言うことを全面的に正しいと判断し信奉しているわけではない、ということである。ましてやリベラルな聖書学者の見解をもって保守的なキリスト教を批判する根拠としているわけでもない。また、腕でも触れたように、わたしが個人的に信仰する宗教の教義を規準にしてキリスト教批判を展開するつもりもない。(これらの問題のうち、前者のリベラルな聖書学に対するわたしの見解等に関してはいずれ詳しく書きたいと思っている。また後者の個人的な信仰の問題に関しても、一連の論述がひととおり終わった後で、できれば後書き的な文章の中で詳しく言及したいと考えている。)

なお、ついでながら言うが、今後さまざまな著作から引用をすることがあると思うが、それらの引用はあくまでわたしの言いたいことを代弁してくれていると思うからそうするので、それも本来は論旨の補強材料として利用するにすぎない。なぜこんなことをわざわざ断わるかと言うと、クリスチャンの中には、過去にわたしが聖書学者の著書やその他の作家の著書からいくらか引用しただけで、「聖書に書かれてあ

ること、あるいはイエス様の言うことは信じないのに、聖書学者や作家の言うことは信じるのか」と反発する向きも少なからずあったからである。もちろん共感しているからそれらの著作から引用することが多くなるわけだが、だからといって、わたしがそれらの学者や作家の主張を全面的に肯定しているわけではない。それに、わたしが非信者としてリベラルな聖書学の立場を是とするからといって、神（超越的・絶対的存在者）を信じていないというわけではない。たしかにわたしには個人的に信仰している宗教があるし、当然ながらわたしは無神論者ではない。言うまでもなく十字架の贖罪などキリスト教の基本教理を信仰しているわけではないものの、イエスの奇跡などの事績や復活、聖霊の働きといった信仰者の体験的事実まですべて否定しているわけではないのである（むろん否定していないからと言って、それらをキリスト教の教義で認められているままの形で肯定しているわけでもない）。

(2-2)「聖書信仰」だからといって否定したいわけではない

次に誤解してほしくないことは、序文の冒頭にも簡単に触れたように、本サイトのタイトルおよび本章の文章等を見て、わたしが「聖書信仰」をただそれだけで否定しているとは思わないでほしい、ということである。わたしが批判対象にしているのは「聖書」そのものではないし、「聖書信仰」そのものを否定したいと思っているわけでもない。わたしが批判対象としているのは、聖書や聖書信仰そのものというよりは、より正確に言えば、聖書やその内容に対する「信仰の在り方」なのである。「聖書の偶像化」[*1] と言った場合も、クリスチャンが聖書という「書物」そのものを偶像崇拝しているなどと言いたいわけではない。わたしが問題にしたいことは、「聖書に書かれたその内容を信じている」と表明した場合の、その信仰の在り方、また聖書解釈の態度・姿勢なのである。

それだから、わたしは必ずしも聖書に対する信仰そのものを問題にしているわけではない。わたしは何もクリスチャンが聖書を行動の規範とすること自体を疑問視しているのではない。わたしは先に序文にて「宗教は人間が人間になるためにある」という見解を簡単ながら表明しておいたが、そのような立場の下、聖書を規準にしたその判断なり行動なりが結果的に**“人間疎外をもたらすようなものであるかどうか”**を問うているのである〔注 1-2 〕。これは聖書にも《安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない》（マルコ 2：27 ）、また、《安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか》（マルコ 3：4 、以上、新共同訳）とあるとおりである。この安息日の箇所を「律法」なり「聖書」なりに読み替えてみれば、わたしが言いたいことは一目瞭然であろう。イエスもはっきりと言っているとおり、聖書（この場合は律法。この時代、「律法と預言者」と言えば聖書そのものを意味したし、律法だけでも聖書を意味した）が絶対的な規準ではないのである。

注 1-2 :これに関してエーリッヒ・フロムは次のように書いている。《問題は、宗教か無宗教かではなく、**どのような種類の宗教か**ということ、すなわち、それが人間の発展を、いわば人間特有の能力の展開

*1 次頁「聖書に名を借りた支配」中の「文字は殺し、霊は生かす―人を殺すこともある聖書解釈―」の項を参照。

を、促進させるものであるかまたはそれらを窒息させるものであるか、ということにあるのである。》〔『精神分析と宗教』谷口隆之助、早坂泰次郎共訳、東京創元社、現代社会科学叢書、1953 年、1971 年改訂版、p.36 、傍点は原著者、ゴチックは引用者〕

(2-3) 人間性を否定するキリスト教を批判している

さらに、自分で言うのも何だが、わたしは(今の時代では単純とも言われるかもしれないが)根っからの性善説論者だったし、その意味でわたしの立場はヒューマニズム(humanism)であると言える。ただし、わたしの言うヒューマニズムは「人道主義(humanitarianism)」のそれであって、厳密に言えば「人間中心主義(Anthropocentrism)」としてのそれではない(もちろん人道主義にも限界があることはよくわかっているつもりだが、その点については触れないでおく。当然のこととしてわたしは保守的なキリスト教解釈を受け入れ難く感じるわけだが、キリスト教とヒューマニズムの問題についてはいずれ詳しく書きたいと考えている)。

そのような立場に対しては、「キリスト教はヒューマニズムではない」という発言が昔からよく聞かれる。最近は仏教者その他の非キリスト教徒でも、「宗教はヒューマニズムではない」という発言をする人も見られるようになった[*1] 。そして、これがわたしのような立場に対する反論にもなるのだろう。しかしながら、「宗教はヒューマニズムではない」という見解に対してはわたしもまさにそのとおりだと思うし、第一に「宗教はもともとヒューマニズムですらない」とすら言えよう〔注 1-3 〕。ただ誤解してはならないのは、宗教(信仰)は本来人間を越えているものなのであって、これはそのかぎりでのヒューマニズム否定であるということだ。それは、だから必ずしも「人間」の否定を意味しているわけではない。ここを勘違いすると大変なことになる。福音書に描かれたイエスの言動を見れば誰でもわかるだろうが、イエスの行動はとても「人間的(ヒューマン)」だ。間違ってもこれを「非(反)人間的」だと思う人はいないだろう。然るにプロテスタンティズムの問題は、人間中心主義としてのヒューマニズムを否定するにとどまらず、勢いあまって人間(性)の否定にまで突き進んでしまったことにあるのではないかとわたしは見ているのだ。個人的な解釈ながら、ここがキリスト教プロテスタンティズムが孕(はら)む最大の問題点なので、それは時に――もっともこれはクリスチャン自身には無意識の事柄ではあろうが――「イエス否定」をすら結実するのである。具体的な事例に関してはここでは触れないが(信仰による人間疎外や、その極端な形態としての聖書カルトの多発はその現われの一端であると言えよう[*2])、こうなるともはや(本来の意味における)キリスト教とは言えない。わたしが批判するキリスト教とは、最終的にはこのような人間否定を結実させるかぎりでのキリスト教なのである。まさに《樹(き)は果(み)によりて知らるる》(マタイ 12: 33)であって、要するになぜそのよう

*1 未読ながら一例をあげれば、臨済宗妙心寺派の禅僧で花園大学学長でもある西村惠信氏の『キリスト者と歩いた禅の道』〔法蔵館、2001 年 5 月〕や『仏教徒であることの条件―近代ヒューマニズム批判』〔同、2004 年 12 月、前者については簡単ながら出版時に書店にて内容を確認済み〕がある。

*2 次頁「聖書に名を借りた支配―信仰による虐待と聖書信仰―」参照。

な反 Jesus 的なキリスト教が生まれてきたのか。本サイト、特にこれから展開する本論においてその問題にアプローチ（対象への接近、働きかけ）をしてゆきたいと考えている。

注 1-3 ：映画『おくりびと』の原作になったとされる青木新門氏の『納棺夫日記』〔増補改訂版、文春文庫、1996 年 7 月〕を読めばそのことはよく実感できると思う。ちなみに、青木氏は映画のシナリオを見て自分の著作を原作としてクレジットすることを拒否したというが、映画封切りの後の毎日新聞のインタビュー記事で、映画を高く評価しながらも、映画が最後までヒューマニズムで終始していて宗教が描かれていない、映画は結局癒しの物語になってしまったと述べている〔 2009 年 3 月 2 日付毎日新聞 WEB 版「おくりびと:「納棺夫日記」との違いは？なぜ原作ではない？」1 ～ 3 、特に 3 〕。

3：批判の意義について――対話的コミットメントとしての批判――

最後に、もうひとつコメントしておきたいことがある。それは、批判批判とバカのひとつ覚えのように書いているが、「批判」という言葉でわたしが何を言いたいのか、何を訴えているのか。また、わたしは批判とはどうあるべきだと考えているか、ということである。（本節は本論から逸脱した部分もある上に、さすがに長くなったので頁を分割、以下にその内容を要約した。詳しくは次頁「有意義義な批判的対話のために」を参照。）

はじめに――批判という言葉をめぐって――

批判を毛嫌いする人は多いが、批判に対する時に過剰とも言ってよい日本人の反応を見るにつけ、わたしは最近「批判的」という表現ではかえって誤解を受けやすいようだと感じるようになった。そして、それでは「批判的」という言葉でわたしは一体何を言いたいのだろうかと少し自問してみた。そこで、わたしが批判という言葉で何をイメージしているか明らかにするためにも、「批判」という言葉から多くの人が受けるであろう誤解をできるかぎり解いておく必要があると思う。批判という言葉から受ける印象が世間一般の人とわたしとで違うとするならば、わたしは「批判」という言葉で何を言いたいのか。まずはそのことについて、ごく簡単にでもコメントしておきたいと思う。

結論を先に言えば、本サイトで言うところの「批判」とは、創造的かつ生産的な行為の一環としての批判的かつ対話的なアプローチあるいはコミットメント（対象に対する傾倒、ないし相手に対して本気で関わる姿勢）である、ということになる。それが真に対話（批判的コミットメント）であるならば、その行為は同時にわたしの生き方を問い返すアプローチともなるはずである。わたしはそのように考えている。詳細は次頁にゆずるが、ここで簡単ながらその内容を要約的に示すことにする〔補説 1-2 〕。

補説 1-2 ：批判の意義に関するエッセイ

ここでこの問題を詳しく論じる代わりと言っては何だが、以前某所に公開した文章を参考までに再掲する。

批判はお嫌い？

とかく批判すなわち《攻撃》と取られやすいものですが、批判的なやりとりといえど本来は《対話》であるはずです。ここではキリスト教を例に批判的行為の意義を強調しておきたいと思います。

聖書には、《「隣り人を愛し、敵を憎め」と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである。天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである。》という言葉があります。自分たちにとって異質な価値観を持つ人々を敵視する「他者否定」の在り方（選民思想）を排し、その代わりに真に人道的な在り方を自らの生命をかけて開示したのがイエスその人であったのです。

このような形で律法（主義）を繰返し批判するイエスは、しかしその一方で、《わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。》とも言っています。矛盾とも見えるこのイエスの言葉の真意は、批判という行為を通して聖書を真の意味で《聖》書たらしめるためのもので、その意味でイエスの言動は妥協ではなく真の調和を求めての行為であったことが了解されます。

そんな訳でイエスの批判は、相手を批判することで、すなわち相手の誤ちを正すことで、あくまで「相手を正しい生き方に導きたい」との強い《愛念》から発しているのです。パリサイ人に対するイエスの批判はそれこそ激越を極めますが、これだって一人ひとりの具体的なパリサイ人たちをイエスがどれほど愛していたかの証拠だとは考えられないでしょうか？　《聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついてくるであろう。》と言いながら、――これはイエスの憤りの言葉でもあると思うのですが、――そして殺されるのが分かっていながら、彼ら敵対者に対してイエスは愚直に「真理」を投げ与え続けたのです。批判するという行為には、実はこのように《愛》があるのです。

もっともそうは言っても、一般に宗教を信仰している人に批判を嫌う傾向が強いことも事実でしょう。しかし、本来は宗教の道に深まれば却って善悪の判断がつくようになり、批判力が鋭くなってゆくもので、無批判に何でも受容することが正しい宗教信仰の態度ではないはずです。それは仏教とて同様で、たとえば修行者を誰でも「法友」として対等に遇した釈迦の教団は、まさに当時のカースト制度に対するアンチテーゼであったとも解釈できるわけで

す。

批判するという行為は、このように、真理を真理たらしめるために、そして、真理を本当の意味でこの世に活かすために本来必要な行為であるのです。要するに批判的行為とは、人を真に自由にし、そのいのちを真に生かすかすためのもので、これこそは仏教が究極的に求めるところでもあるのです。

皆様のご批判をお待ちしております。

※聖書の引用は日本聖書協会・口語訳聖書によりました。

1：対話的コミットメントとしての批判

コミットメントとしての批判

いろいろと考えてみた結果、どうやらわたしは「批判的」の語をコミットメントの意味合いで使っていたようだ〔コミットメントという語についてわたしがどのような意味を読み込んでいるか、その詳細な議論は事項中の「補論：コミットメントとその意味について」を参照のこと〕。つまりわたしは、「批判的」とは「関わりのなさ（デタッチメント）」とは正反対の態度だと捉えている。それに加え、最近わたしは「チャレンジ」という言葉に注目するようになった。チャレンジという言葉には非難とか攻撃といったニュアンスはあまり感じられない。他者から批判された時に、わたしたちも「チャレンジされた」と捉えるようにすれば、さほど感情的にならずに相手に対することができるのではないか。さらにわたしは、最近アプローチという表現にも着目するようになった。これは対象への接近法ないし働きかけ、対象に迫ることを意味する言葉である。だからここで言う批判とは、批判的なアプローチ、すなわち批判的な形を介した対象への接近ないし働きかけの試み以外のなにものでもない。したがってコミットメントとは、対象に対するチャレンジないしアプローチ（対象への接近法）なのであり、批判とはまさにそのような行為を言うのである。

対話としての批判

対話は本来自分が変わることも引き受けて行なわれるものであり、それは自他の生き方が問われる実存的な行為でもある。その意味で真に批判的な営みは対話的アプローチでもあるはずなのだ。それに、自分のことは自分ではわからないもので、わたしも含め大概の人は自分の考えや主張が全面的に正しいと無意識ながら考えて生きている。その思い込みを補正するためにも他者からの批判的アプローチは大切なので、そのためにも他者と真剣に関わり、そのやりとりを通して自己を知る作業が必要となる。

2：有意義な批判的対話のために

わたしは、自己目的化した批判はすべきではないし、批判をするならば自分が批判されることを忌避すべきではないと考えている。

動機なき批判は無意味である

批判が不毛なものとならないためにも、批判を行なう側の「動機」――すなわち、“どんな目的でその対象を批判しているのか”といった反

省は極めて大切な視点となる。いくら動機があるからといっても、それが自己目的化した批判であってはあまり意味をなさない。自己変容の可能性に開かれていないやりとり、あるいは自己批判の契機を欠いた他者への一方的な批判は、結局は批判対象である相手と自分たちという「敵味方」図式をもたらすだけだし、それは容易に自己の立場の絶対化を招来する。わたしたちは往々にして自分たちを一方的に正しいと思い込みがちだが、そのことに対する反省は忘れてはならない。そのためにも、わたしたちは自分の行なう批判がただの一方的な攻撃になっていないか常日頃から自らを省みることが必要となる。

対話の姿勢が問われている―反論されるのが嫌なら初めから批判するな―

「批判をするな」という主張（それこそ立派な批判である）をよく見かけるが、この手の主張をする人間に限って、いざ相手を批判する段になると、批判と言うよりは単なる人格攻撃をしがちである。また、批判を嫌う人には、非論理的なタイプばかりでなく、実は意外と論の立つ人（いわゆる自分への批判は許さないタイプ）も見られるように思うが、その手の人間は、実は批判と言うよりは対話を嫌っているのだろう。わたしたちは“対話の姿勢があるかどうか”を問われているのだ。時に自分ではあれこれ批判をしていながら、いざ相手から何か言われると腹を立てる人を見かけるが、このような人間は、自分の発言に責任を負えない、あるいは自分の発言に対する覚悟がない人なのだろう。日頃から批判の意義を主張し、批判的発言を行なっているのならば、相手からの反論は覚悟しなければならないし、それ以上に、そのような応答はこれを喜んで受け入れなければならない。これは批判ばかりでなく対話を行なおうとする者の責任であり覚悟である。

3：対話の姿勢―議論の前提として心懸けるべきこと―

変わることを怖れるな

批判もまた対話的アプローチでありコミットメントであって、対話は自分が変わることも引き受けて行なわれる、要するに自他の生き方を問う実存的な行為である。だから、自分の意見が変わることを怖れる人、あるいは拒否する人には対話は不可能だ。また、対話的意図ないし何らかのコミットもなしにその相手を一方的に非難しているような人がいるとしたら、それは批判というよりは攻撃と捉えた方がよい。批判を含む意義のある宗教対話を行なうためにも、もっと他の思想や宗教に対する敬意ないし真摯な態度がお互いに必要となる。至らない点があればこれを改める勇気も必要だ。自己の信念が少しでも変わることを怖れていては対話そのものがもともと不可能なのだ。

相手に誠意をもって対する

これまで相手に対して敬意を持つことを強調してきたが、どうしても敬意を持てない人もいるだろう。これに関してわたしは、“何に対して敬意を払うか”を考えたらよいのではないかと思っている。敬意には、相手の能力に対する敬意（条件付きの敬意）と相手の存在そのものに対する敬意の二つがあり、後者の敬意こそが対話の基本だと思うからだ。尊敬できる何らかの能力を有した相手にしか敬意を持たないという態度は結局、能力のない奴は評価しない、切り捨てる態度だが、そのような態度では（自分より劣っていると判断した相手との間に）実りのある対話は成立しない。そこでわたしは、相手に対する敬意よりも先に、今後は「誠

意」を重視するアプローチがよいのではないかと思う。これもかなり形式的になる危険性はあるものの、相手に対して攻撃的な態度に終始するよりは、まずは何事も良識を弁えた丁寧かつ誠実な態度でやりとりをすることを心懸けることは決して間違っていないはずだ。それに加えて、“その相手に対して関心ないし興味を持てるかどうか”という視点がコミットメントには重要な要素となる。人間存在に対する敬意を誰に対しても持てるようになるためにも、わたしたちは対象となる相手に対して心から興味(ここで言う興味は、単なる好奇心のレベルのそれではなく、「目の前のその人のことを心から知りたいと思う強い気持ち」と言った意味合いをこめて使っている)を持って接し、あるいはその相手に対して誠実な関心を寄せることに徹することが肝要なのだ。

議論の形式に囚われるな

論理的でありさえすれば誰もがその人の主張を受け入れるとは限らない。そういった相手を説得するには、その相手に対していろいろな側面からアプローチするのが当然だろう。およそ人間は一人で生きているわけではなく、しかも他者は自分にとって都合のよい反応をしてくれる存在ではない。いや、自分にとって都合の悪い反応をするのが本来の他者なのだ。そういった他者がいてこそ対話(議論)が成り立つので、その意味で議論や対話は一人ではできない。それに対して論理的であることを自認する一部の人は、自分にとって都合の悪い反応をする相手に対して当然敬意など払わないし、切って捨てる人も多い。議論を一人で行なっているつもりなのかもしれない。そのため、相手が誠意を持って議論に臨んでいるか、あるいは何らかの正当な理由があって反論なり異論をはさんできたのだとしても、そんなことは無視をする人も多く見受けられる。だが、それでは実りある対話は不可能だ。論理的であることを自認する人たちの問題点は、自分が論理的に思考するのはよいのだが、相手にも自分と同様に論理的であることを求めるところにあるのではないか。そのように都合よく論理的な反応をしてくれる人ばかりがこの世には存在しているわけではないから、その望みはあまり現実的だとは言えない。自分がいくら論理的思考に長けているからと言って、あまりに形式的な議論に固執すると、そのような訓練を受けていない、あるいはそれをあまり得手としない相手がいだく違和感や疑問を切り捨ててしまうことにもなりかねない。生産的たりえたかもしれないやりとりの可能性をその段階で摘み取ってしまっている可能性すらそこにはあるのだ。

曖昧さに耐える勇気を

論理的思考に長けていない人との間の一見非効率とも見える時間のかかるやりとりは必ずしも無意味ではない。マスローは、本来曖昧で矛盾を孕んだ人間存在をその現実のままに記述する態度を真に科学的な態度だとし、そのためには科学者の側に《曖昧さに耐える勇気》が必要だと述べたと言う。本来曖昧なものを曖昧なままにしておくストレスに耐えられず、効率だけを求めて拙速に白黒をつけたがる態度は、やはり対話の精神からかけ離れたものだと言わざるをえないし、それはまた真に論理的で理性的な態度とは言えない。

対話の精神について

パソコン通信を中心とした掲示板（BBS）全盛時代と違い、近年は2chやTwitterといった短文投稿サイトが主流である。書込みに対する返信も含め、近年は何事もスピードが要求される。そんな変化の中で、ネット空間においてギスギスしたやりとりが目立つようになってきた。たしかに以前のように何事にも熱くになって議論する作法はもう流行らないのかもしれない。しかし、そのように相手と本気で関わることを忘れつつあることが、ネットにおいて昔以上に

要らぬ炎上をもたらしている原因でもあるのではないか。しかも近年におけるネット上の書込みはその大半は短文の言い捨てで、中傷的な発言をする人が非常に多いのが特徴的だが、これでは対話が成り立つわけがない。かつてのように本気で議論すれば、そこそこ炎上も起こるし、時間ばかりかかって非効率極まりないだろうが、効率ばかりを求めて、時間のかかるやりとりを必要以上に嫌う姿勢は、結局は対話の精神を蝕(むしば)むことになる。物事に対して本気で関わろうとしない態度が、かえって生産的な議論を生まない要因を育んでいるのではないか。一見非効率とも見える時間のかかるやりとりも決して無意味とばかりは言いきれない。《曖昧さに耐える勇気》を持たず、効率だけを求める態度は、やはり対話(ディベート)の精神から遠いと言わざるをえない。議論のノウハウ以上に大切なことは、その人が誠意を持って相手とやりとりをする気持ちがあるかどうか、そこに対話の姿勢があるか否かなのだ。

批判もまた議論の形を取るかぎり、それはやはり対話なのである。それは、単なる効率ばかりを優先した論理的思考やそれに準じたたディベートとは本来異質なものである。そのやりとりがいくら非効率で時間ばかりかかるとしても、わたしたちは決してそのプロセスをおろそかにしてはいけない。対話ないし議論とは、お互いに違う価値観を持つ者同士が、そのお互いの違いをよく把握し、なおかつお互いに自分の意見をいくらか変化させながら、お互いを理解するやりとりである。賽の河原の石積みにも似たそのプロセスをはしょらずに続けないかぎり、対話(議論)が実りあるものになることは決してない。対話は「時にお互いが理解し合えないほどに違うことがある」という気づきから始まる。対話とはだから、それでもなおその相手を理解しようという強い意志とその相手に対する興味があって初めて成り立つ行為なのである。

最後に

そういった次第で、わたしが言う批判的アプローチは、上記で述べたような不毛な「攻撃」ではなく、あくまで創造的かつ建設的な行為としてこれを行なってゆきたいと考えている。

以上いろいろと書いてきたが、要するに本サイトで言うところの「批判」とは、創造的行為の一環としての批判的かつ対話的なアプローチあるいはコミットメントである。当然ながらそれは単なる攻撃(aggression:これには侵略の意味もある)ではなく、ノン・クリスチャンからの主体的なチャレンジでもある。そして、それが真に対話(批判的コミットメント)であるならば、その行為は同時にわたしの生き方を問い返すアプローチともなるはずである。そのように考えて、わたしはこのサイトを運営してゆきたいと考えている。

以上長々と書いてしまったが、大略こんなことを考えて、今後もキリスト教に対して批判的なアプローチを行なってゆく所存である。

補足説明2：対話的コミットメントとしての批判
――有意義な批判的対話のために(2)――

> 人をさばくな。自分がさばかれないためである。あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか。自分の目には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの目からちりを取らせてください、と言えようか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう。
>
> （マタイ 7:1-5）

内容がだいぶ長くなったので、思いきって分割した。

わたしがキリスト教に対してどんな姿勢で批判的なアプローチを行なう所存か先に詳しく説明した。本頁ではそれとは別に、そもそも批判的アプローチとはどのようなものか、どうあるべきものか。拙いながら、以下にわたしなりの考えを書いておくことにした（一部に重複もあるが、ご容赦願いたい。また、今後必要に応じて加筆を行なう場合もある）。

> ※期せずして、本頁は非常に長くなってしまいました。無理をして読んでもらうのも恐縮なので、お忙しい方は前頁の要約をご覧下さい。その上で、特にここは読んでいただきたいと思う箇所を朱色で強調しておきましたので、できればそこだけでも目をとおしていただけると幸甚です。（2016. 9. 24追記）

1：対話的コミットメントとしての批判

日本人はとかく批判を嫌い、古来「言挙げせざる」ことをよしとしてきた。そのような風習も手伝って、多くの人によって「批判はいけない」こととされている。この「批判するな」という主張――そのこと自体が立派な批判なのだが――は、いわゆるスピリチュアルリストに多く見られるものだが、カウンセラーなど臨床心理の専門家にもよく見かける主張である。クリスチャンにもそのような主張をする人は多くいるようだ。このような主張はとても良心的に聞こえるし、その発言の主も日頃はよい人なのだろう。ところが、そのような主張する人に限って、何かの事情で自分がいざ相手を批判する段になると、批判と言うよりは単なる人格攻撃になりがちなのもよく見られるところである。その人たちにとっては、批判は単なる誹謗中傷といっしょなのだろう〔注 2-1〕。

批判を嫌うこういった多くの人々の姿を見る中で、最近わたしは「批判」という表現では誤解を受けやすいようだと感じるよ

うになった。そして、批判という言葉から受ける印象がもしも世間一般の人とわたしとで違っているとすれば、わたしは「批判」という言葉で何を言いたいのか、いくらか反省してみた。以下、その考察の結果をなるべく詳しく展開してみたい。

注 2-1 ：日本人は和を強調し、対立を嫌う。批判を嫌い、異質なものを排除し、出る杭を打つといった多くの欠点を持っていることはそのとおりではあるが、しかしその一方で、《和を以て貴しとなす》それら日本人の特性がその美質を形成してきたことも事実である。美質と欠点とは裏腹なのだろう。国際化社会の中で、その日本人の美質は残しておきたいとする意見は多く、わたしもその点は同感なのだが、それができるかどうか。美質を残そうとするかぎり欠点は消えないかもしれないと思っている。

(1-1)コミットメントとしての批判

わたしが批判ということについて特に意識して考えるようになったのは今から15年ほど前のことである。青野太潮『どう読むか、聖書』[*1] という本を読んで批判的営為に関していろいろと学ばされたのもその頃のことだった。そのことに関して、大貫隆氏がたしか『隙間だらけの聖書――愛と想像力のことば(大貫隆奨励・講演集)』[*2] という本の中で本書を書評していて、そこで、青野の言う「批判的」とは「主体的」という意味だと書いていたことが大変印象に残っている。実はその時はこの表現があまりピンと来なかったのだが、後でよくよく考えてみると、実はわたしは「批判的」の語をコミットメント（commitment）の意味合いで使っていたらしいことに思いいたった。さらに、その意味で言う「批判的」とはどうやら「主体的」と言いかえても間違いではないらしいと思うようになった。最近確認したところ、青野は同書の中で《「批判」とは、その言葉の本来の意味を問うていくこと、物ごとに対して否定的な見方をするなどということを意味するのでは全くなく、むしろ**主体的に**自らの判断をし、そこで問題になっていることがらをしっかりと識別していくことを意味しているのである》[*3] と書いている。これはわたしもそのとおりだと思うが、そうすると、「批判的」とは、「関わりのなさ（デタッチメント）」とは正反対の態度であるということになる（この表現に関しては、以前読んだ『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』〔岩波書店、1996 年〕における村上の表現に多少触発された面もある。ちなみに detachment は、超然・無関心・分離・孤立など、要するに「(相手・対象と)関わらないこと」を意味し、これは愛情や愛着を意味する attachment の反対語でもある)。だから、真に批判的な営みは「対話的」アプローチでもあるということになるはずなのである[*4]。

---

*1 朝日選書、1994 年 1 月

*2 教文館、1993 年 6 月

*3 青野『どう読むか、聖書』、p.143 ～ 144 、ゴチックは引用者。

*4 コミットメントの意味に関する詳細な説明は、「(1-4)補足説明：コミットメントとその意味について」を参照。

(1-2) 対話としての批判

対話（議論や批判を含む、したがって会話とは違う）とは、本来自分が変わることも引き受けて行なわれるものであり、それは自他の生き方が問われる行為でもある。それに加えて、対話（dialog）はもともと弁証法（dialektike）の語源となったソクラテスの問答法に由来するもので、（欧米においては）対話とは批判的な要素を本来内在させている言葉でもある[*1]。かいつまんで言えば、対話とは自他の生き方を問いなおす批判的な営為なのである。

それに加えて、わたしも含め大概の人は、自分の考えや主張が全面的に正しいと無意識ながら考えているものである。そのような思い込みを補正するためにも、他者との対話や相手からの批判的アプローチないしチャレンジが必要となる[*2]。それだから、相手からの異論をただそれだけで排除してしまうのは大変もったいない行為であると言える。批判を含む対話とは、相手に対する敬意と、話題となる対象ないし真理に対する謙虚さを必要条件とする知的かつ実存的なやりとりなのである。

(1-3) チャレンジおよびアプローチとしての批判

時に過剰とも言ってよい批判に対する日本人の反応を見るにつけ、最近わたしはチャレンジ（challenge）という言葉に注目したらどうかと考えるようになった。これは「（相手から）チャレンジを受ける」というように使うのだが、翻訳でよく見かける表現である。そこで、わたしたちも他者から批判された時に「チャレンジされた」と捉えるようにすれば、ことさらに感情的にならずに相手の批判に対することができるのではないだろうか。少なくともわたしはこの表現にしっくりくるものを感じるが、それはチャレンジ（相手にぶつかってゆくこと、挑戦）という言葉に非難や攻撃といったニュアンスが少ないからかもしれない。

さらにわたしはアプローチという表現も何度か使ったが、アプローチとは対象への接近（法）ないし働きかけを意味する語で、それは「対象に迫る」ことを意味する言葉である。だからここで言う批判とは、批判的なアプローチ――批判的な形を介した対象への接近ないし働きかけの試み――以外のなにものでもないということになる。だとすれば、それはやはり攻撃ではなく、対話の試みなのである。

---

*1 中埜肇『弁証法―自由な思考のために―』中公新書、1973 年 4 月. 弁証法の語源に関してはp.14 ～ 17 参照。弁証法の起源は厳密にはソクラテス以前にまで遡るが、哲学用語としての弁証法という言葉が定着するのはプラトン以後のことである。

*2 早坂泰次郎『人間関係学序説―現象学的社会心理学手の展開―』川島書店、1991 年 4 月、p.31 ～ 32.参照。

(1-4) 補論：コミットメントとその意味について

コミットおよびコミットメントは、わざわざ日本語にせずにそのまま使われることが多い。では、コミットメントとは一体どのような意味を持った言葉なのだろうか？　多少回り道だが、ここでその点について詳しく論じておきたい。

コミットメントとは？

コミットおよびコミットメントの語にどのような意味があるか、わたしはそれをどう捉えているのか、まずはその点についてなるべく詳しく説明しておこう。

コミット（commit）ないしコミットメント（commitment）の語〔注2-2〕は、これが一般に人間関係の文脈で使われる場合は、自己投入とか対象に対する専心ないし傾倒、あるいは「（他者に対して）本気で関わる」ことなどさまざまに意訳される。わたしは最近それに加えて、身を入れる、ないし「（対象に対して）踏み込む」という意味合いでもこの言葉を使いたいと考えるようになった。コミットメントとは、このように他者との真剣な関わりを意味する言葉なのである。

注2-2：コミット（commit）は、手許の英和辞典によると、（対象に対して）専心ないし傾倒することの意味の他に、（対象に）関与する、責任を果たす、自分の立場や態度を明らかにする、（相手に）身を任す・委ねる、あるいは犯罪などを犯すなどさまざまな意味のある語であることがわかる（研究社英和中辞典およびジーニアス英和辞典参照。この語は「人に委ねる」が本義で、語源的にはラテン語の「一つに組み合わせる、委ねる」が原義であり、「ある人のところに（com）」＋「送る（mit）」から派生した語である。また、『広辞苑』第四版では「かかわりを持つこと。関係すること」とある）。このように、この語はもともと日本語にしにくい語であるため、あえて日本語にせず、そのままで使われることも多い。

それに関して、いつも思い出すある番組がある。それは、たしか 90 年代前半くらいに放送された教育 TV の番組で、写真家の橋口譲二氏が若者たちに対して写真の撮り方をレクチャーするという内容だった。番組は、前半で写真を撮る心構えといったものを質疑応答などを通して若者たちに橋口が伝えながら、後半で上野動物公園に撮影に出かけるというものだった。橋口の語ることはその時はずいぶん心に響いたのだが、残念なことに前半の内容は覚えていない[*1]。ただ後半の撮影会で、ある若者が動物の折の前にいた初老の夫婦を撮っているところで、「もっと近づいて撮りなさい」と橋口がアドバイスしている場面はよく覚えている。人を撮る場合、近づいて撮れば失

*1 橋口譲二、星野博美『対話の教室―あなたは今、どこにいますか？―』（平凡社、2002 年 7 月）の、特に東京でのワークショップをあつかった箇所において多少その片鱗をうかがうことができるかもしれない。

礼に思われるかもしれないし、それを考えてこちらがひるむかもしれない。それでも、相手に近づきなさい、へっぴり腰になってもよいから撮影対象にもっと近づきなさい。若者に対して、橋口はそんなアドバイスをしていた。有名な写真家でも、望遠レンズを使って遠くから人物を撮る人もいるようだが、しかし、橋口の写真の撮り方、撮影に対する姿勢といったものは、それとは正反対のものであると言える。写真集自体あまり見ないわたしは、橋口譲二という写真家がどんな写真を撮るのか、実際にはあまりよく知らない。けれども、人物を撮ることが多いとされる橋口は、写真家として撮影対象に対してコミットしているのだと言ってよいと思うのだ。この番組を見たからかどうかは不明ながら、写真撮影であろうが、何であろうが、対象に対してより近づく(対象にアプローチする)こと、その対象に対して踏み込むこと、その姿勢をわたしはコミットメントだと捉えている。

相手に対して興味を持つ

次に、とても重要な観点として、「興味」という視点、すなわち「対象に対して興味を持つ」というアプローチ(対象に対する接近法)について触れておきたい。

同じような話題で恐縮だが、先に触れた写真家の橋口は、自分が街で人を撮る時に滅多に断わられたことがないという。橋口によれば、それは、彼がその写真を撮りたい相手に対して興味を持っていることを素直に表に出しているからだろうと言うのだ[*1]。写真家として彼が時に撮影の対象とする社会の底辺層にあるような人たちの場合は特にそうだが、その相手に対する軽蔑や、あるいは憐憫といった感情がこちら側にあると、その相手はそれを敏感に感じ取るものだ。そういった話はよく聞くと思うが、そのような態度で相手に接しても、その相手から決してよい反応が返ってこないことは当たり前だと言ってよいだろう。ところが、人と関わるには邪魔なそういった夾雑物に等しい感情がなく、「あなたのことを知りたい」という純粋な興味で近づく橋口に人が心を開くのもまた当たり前だと言ってよいのである。

それに対して、このように「興味」ということを強調する視点に対して、逆にこの言葉を避けたいと思う人も多く見受けられる。これは興味という言葉に対するマイナスのイメージ(この場合の興味はせいぜいよくて「好奇心」のレベルを超えないし、時には相手を小馬鹿にしたような「興味」すらある)が原因であると思う。そのため、ここは「興味」という言い方よりも、デール・カーネギーに倣って、《相手に対して誠実な関心を寄せる》(『人を動かす』)とでも言った方が誤解が少ないかもしれない。しかしながらわたしは、「関心」という表現にはどうも静的(スタティック)な印象が強く、批判や対話においてコミットメントを強調する立場からは、(特に人間に対しては)「興味」という表現の方を好ましいと日頃から感じている。そのため、「対象(特に人間)に対して興味を持つ」と言った場合、わたしは「興味」という言葉を単なる「好奇心」としてではなく、**「その相手のことをもっとよく知りたい」**という強い気持ちというくらいの意味合いで使いたいと思っている。その「知りたい」という気持ちは、相手の業績や年齢、あるいは知識といった表面的なことばかりではなく、それらを

*1 橋口前掲書、p.292.

剥ぎ取っても在る本来のその人らしさ、裸のその人そのものを知りたい、という気持ちである。さらに言えば、その「知りたい」という場合の「知」は、相手のことを「知識として所有したい」という「所有としての知」ではない。強いて言えば、それは対象を大切に思うところの知、すなわち「愛する知」なのである（かつて戦国時代に渡来したキリスト教の宣教師がキリスト教で言うところの愛を「御大切」と訳したとされるし、さらに現代でも、マザー・テレサは「愛の反対は憎しみではない、無関心だ」と述べている）。古代ギリシアにさかのぼる哲学（ philosophy ＝フィリア〔 Philia ：愛〕＋ソフィア〔 Sofia ：知恵〕）の語源としての「愛-知」とはかなり趣（おもむき）が違うが、このような「知」もまた立派な「愛-知」なのだとわたしは思っている[*1] 。したがってそれは、ビジネスその他の何らかの目的のために相手を上手く利用することを目的とした観点から言われる「相手に誠実な関心を寄せる」などというアプローチとは一線を画している。ここで言うところの「相手のことをもっとよく知りたいという強い気持ち」という視点からすれば、そのような「関心」には「無関心」の語の方がよりふさわしいと言えよう。強いて言えば、それは「操作的な関心」の域を少しも出ない自己中心的な興味ないし関心でしかない。したがって、それは真の意味では「関心」とは言えないものなのである。そのような誤解を避ける意味でも、「関心」ではなく「興味」の語をわたしは選んで使っている次第である。

むろん誰もすべての人に対してそのような態度を取れるものではない。けれども、そのようなレベルでの「知りたい」という気持ち、そのようなアプローチ（対象に対する接近すること）の姿勢が根底にあって普段から人に対しているかどうか、といったことは問われてもよいのではないか。いや、その人の人間関係の姿勢・態度としてこれは問われるべき事柄であろう。わたしはそのように思っている。

自己投入と自己超出

最後に、コミットメントの語義からは多少逸脱するかもしれないが、ここで実存主義的な観点も多少加味した視点からコミットメントについて考察しておきたいと思う。

目の前の対象に対してコメット（自己投入）するということは、これはその対象に対して、あるいはその対象との主体的かつ実存的な関係の中に自己を投げ出すことであると言える。それは、他者との関係の中で個人的自己を超出ないし超越する行為でもあると言えよう。

あまりに個人的な体験で恐縮だが、わたしも若いころは自分のことが嫌いで、自分を受容できていなかった。そんなわたしが、ある時ふとしたことからある女性に好意をいたき、従来のわたしとは違い、思い切ってその人に対してアプローチしたことがある。もっとも結果は不首尾ではあったものの、そのとき気がついたことは、相手に対して本気で関わっている時には「嫌っている自分」などといったものはどこにも存在しない、ということだった。これは何も恋愛にかぎらない。何事にせよ、本気で何かにコミットしている時には、近代人特有の思考過多・反省過多な自我などはどこかに消し飛んでしまうのであって、これをわたしはコミ

*1 前章で引用・紹介したエッセイ「批判はお嫌い？」においても、コミット（批判）することと愛については若干ながら触れてある。

ットメントに伴う自己超出なり自己超越と捉えている。わたしの体験などはたしかにごく些末で貧弱なものでしかない。しかし、たとえそれがどんなに些細な行為であったとしても、「千里の道も一歩から」で、何事もその小さな一歩から始まる。相手に興味を持ってその相手に本気で近づこうとする行為(アプローチ)は、だから、そのまま自己を越える行為ともなりうるのである。それは実存哲学的な表現を使えば一種の「投企」であり、「賭」でもあると言えるのではないだろうか。

ある対象に対して強い興味をいだき、その相手のことを心底から知りたいと思ったとしよう。そのとき人は、具体的にどのようなアプローチをするかは別にして、必然的にその相手に対してコミットするだろう。その時その人はその相手の世界の中に必然的に踏み込むことになる。このとき個人的な世界の中でのみ生きていたその人は当然ながら自己を超越することになるが、一方の踏み込まれた当人の方も必然的にその相手との関係の中に引き込まれることになる。したがってコミットメントすること、コミットメントした先にあることは、お互いの関係の中でお互いが自己を超越しあう関係に生きるということなのである。それはまた、お互いが自己を実現し合う関係〔注 2-3 〕であるとも言えよう。

注 2-3 :これをわたしは「相互自立的人間関係」と表現したい。この表現は前掲の早坂『人間関係学序説』p.183 における「相互主体的人間関係(Interpersonal Relationship)」という表現からヒントをえたものである。もっとも「主体的」も「自立的」もほぼ同様の意味だと解すことができるし、前者の方が意味が広く、よりすぐれた表現だとも思う(自立するとは極めて主体的な事柄であると言える)が、あえて後者の「自立的」の表現を用いた。

たしかにこのような関係の取り方は、下手をすると傍若無人な印象を与えるし、暴力的ですらあると批判されるかもわからない。しかしながら、個人的な自己を超えて相手との関係の中に踏み込まないかぎり他者との真の出会い(エンカウンター〔注 2-4 〕)はないということも事実なのである。そこには正答といったものはなく、わたしたちは迷いながらも相手に対してコミットしてゆく以外ないのだろう。そういった面は重々承知しながらも、自分にとってないがしろにできない対象に対してコミットすること、また、その対象に対して本気で関わる、関わろうとすること、そのことをわたしは本来「批判」のあるべき姿だと捉えているのである。

注 2-4 :日本においては、一般にエンカウンターは「出会い」の意味として理解されることが多い。しかし、欧米語で encounter と言った場合、それは元々は「ぶつかって(counter)中に入る」が原義で、「敵や危険との出会い頭の偶然の遭遇、直面」といった意味の語として使われている〔『ジーニアス英和辞典』改訂7版、2000年7月〕。そこには、日本語の「出会い」という言葉から連想される微温的な「優しさ」といったようなニュアンスはほとんどない。批判に対する彼我の感覚の違いもその辺の感覚の違いにも由来しているのかもしれない。欧米社会においては出会いも対話も本来は価値観が違う者同士のぶつかり合いを意味する言葉なのだ。

現実世界に根を下ろした自己超出

ここでいささか余談ながら、自己超出ないし自己超越ということについていくらかコメントしておきたいと思う。

上記で述べたような対象にコミットすることによって自己超出が起こったとき、個人的自己は全体の中に「解消」されるのではなく、全体の中で（他者とともに）真に自己を実現し表現することになるだろう〔注 2-5 〕。少なくとも個人主義的な狭い自己は越えられて、そこに新しい世界が開けてくることになる。それは、単に現実を（時にその現実を無視して）「超える」ことではなく、現実の中で・現実に根ざして、なおかつその現実と自己をともに「越えてゆく」ことを意味している〔補説 1-3 〕。そして、この現実の中で・現実とともに、その現実を（人々とともに）超えてゆくアプローチこそが真に宗教的な姿勢であり態度だとわたしは理解しているのである。しかし、いくら宗教的（霊的=実存的）だからと言って、ここで言うところの「超越」は、自己を大いなるもの（超越者）の中に安易に「解消する」ことを必ずしも意味しない。それは、むろん滅私奉公的な主張やその種の全体主義的なアプローチをその根本から拒否し否定するものなのである〔注 2-5 〕。

注 2-5 :ここで言う自己超越は、ニューエイジ系の思想や人間性回復運動（ニューマン・ポテンシャル・ムーブメント）などの影響を受けたトランスパーソナル心理学などでよく言われるところの「自己超越」とは異質なもの、あえて言えば似て非なるものだとわたしは捉えている。たとえばその手の心理学で言われる変性意識状態（ Altered state of consciousness ）などは、他者との厳しい対決などなくても実現できる意識状態である。それは、薬などによる外からの脳刺激などによってももたらされる極めて個人的（厳密には個我的と言うべき）な種類の意識の状態なのである（事実アメリカにおいて LSD が合法だった 1960 年代前後には、その手の研究者がこぞって LSD を実験に利用していたことはよく知られているところである。それが 1960 年代後半に LSD が禁止薬物に指定されると、意識や自己の超越を求める人々は、その手の意識状態をえるために、今度は東洋の修行法、特に呼吸法や瞑想法などをその代用として好んで用いるようになる）。そのような特殊な意識状態をもたらすことに治療的な効果があることも事実なので、そのような試みがまったく無意味だと言うつもりはない。ただし、そのような特殊な脳の状態は、必ずしも他者との関わりの中での自己変容を伴わった変化ではないという意味で、それはやはり個人の体験を超えないのである（うまくは言えないのだが、そのような他者の存在を無視したに等しい個人主義的なアプローチでは、個人を否定する集団主義とその行き着くところの全体主義に対抗する力にはなりえないとわたしは見ている。また、そのようなアプローチは、「呪術的」ではあっても、決して真の意味で「宗教的」とは言いえず[*1] 、したがって真の信仰はそのような姿勢・態度からは決して生まれてこないのである）。なお、以上の議論は個人主義的な西洋近代的な自己概念に慣れ親しんだ人にとってはわかりにくいところがあるかもしれない。そこで参考までに「自由」に関して同じような視点から考察して

*1 宗教と呪術の違いについては、次文書「怖れに根ざした信仰」中の「畏怖と怖れ」における「補説 2-2 :宗教的態度と呪術的態度」を参照。

みよう。自由と言うと「身勝手」と同じような事柄と捉える人も多いだろうが、それは、誰かが自由になれば、その影で他の誰かが不自由をかこつことが多いからだ。そう考えると、すべての人が自由を謳歌することは本来不可能だということになる。それに対して、このように個人が周囲と無関係に一人で勝手に自由になるのではなく、「周囲の人たちと共にお互いに自由にななってゆく」という視点でこの問題を考えればどうだろうだろうか。これも完全な実現は不可能だが、一人で自由になろうとあがくよりも、こちらのアプローチの方がよほど現実的な視点だと思う。それこそが本来の意味における「自由になること」すなわち自由の実現なのだ。そのようにわたしは理解している。自己の実現もそれと同じで、お互いの関わりの中において自己を実現してゆくのである。それは時に激しいぶつかり合いとなることもあるだろうが、しかし、そのような「出会い(＝ぶつかり合い)」〔注 2-4 参照〕を通さないかぎりは、人は真に自己を実現することはできないのである。わたしはそれを「相互自立的な人間関係」〔注 2-3 参照〕の在り方だと捉えているのである。

補説 1-3 :「超えてゆく」ということ

「超越」という言葉をわたしがどのように捉えているかを参考までにここで簡単に説明しておきたい。「超越」とか「超越する」という言葉を見聞きすると、一般には大地から離れて、すなわち地上の制約から解放されて空中高く飛び上がるようなイメージをいだく人が多いだろう。しかし、今のわたしのイメージでは、「超越する」(transcend ないし transcendental)と言った場合、本来は、地面から空中に浮遊するようなイメージではなく(トランスパーソナル系の心理学で言うところの超越はこのイメージが強いように思う。一部の修行系宗教も同様なものが多い印象がある)、山登りのイメージが合っていると思う。たとえばどこかの盆地なり谷間に住んでいる人が広い世界を知りたいと思い、住みなれた世界を後にして、周囲の山を踏み越えて、自分の知らない新しい世界に出てゆくとしよう。それが一つの超越、超えてゆく行為である。ただし、一山越えたその人の前には、さらに別の大きな山並みが立ちはだかり、挑戦はいつまでも続く。完結や完成、ないし最終解脱などといったものは、人間が生きているかぎりどこにも存在しないのである。あるいはある登山家がどこかの山を登り、さらに高い山を目指し続けたとしよう。しかし、その登山家が最後にどのように高い山の頂(いただき)に至ったとしても――たとえどんなに高い山、たとえばそれがエベレストの山頂であったとしても――そこは空中ではない。そのとき彼の足は地面から一歩も離れていないのだ。これが「超えてゆく」という言葉に対してわたしがいだくイメージである。単なる「空中への飛翔」といった意味における超越(trans)ではない、このように一歩一歩大地を踏みしめながら山を越えてゆくというような、そんな感覚をこの言葉に対してわたしはいだいている。(以上はどうも表現がまだまだ稚拙な感じが否めないため、もう少し考えをまとめて後日書き直しをしたいと思っている。)

聖書(福音)はコミットメントに満ちている

最後に、ひとつ指摘しておきたいことがある。

聖書、特に福音書を読めばわかると思うが、前頁で引用したわたしのエッセイ「批判はお嫌い？」にも書いたように、イエスの言動、そしてキリストの福音こそがここで言うところのコミットメントだということである。ここではこれ以上詳しく書けないが、世界に自己を捧げたのは、一人イエスだけではない。パウロもまた周囲の世界に対し、そしてキリスト教信者となった人たちに向かって本気でコミットした。それは旧約の預言者たちにしても同様であったはずである〔注 2-6 〕。聖書はその意味でその全編がコミットメント（それを批判精神と捉えることも可能である）に満ち満ちているのである（これだけではなかなかうまく言いたいことが伝わらないだろうと思うが、この問題に関しては後日詳論したいと考えている）。

注 2-6 :いや、聖書の文脈から言えば、神そのものが人類に対し積極的に関与されているだと捉えるべきであろう。聖書にもあるとおり、《わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さっ》た（一ヨハネ 4：10 ）のであって、何事もわれわれに対する神の「関与」が先立つのである。上で展開したコミットメントの意味からすれば、まずわたしたちに対する神の働きかけによって、そしてそれと同時に、われわれは期せずして神との関わりに引き込まれてもいることになる。わたしたちは、神がまずわたしたちを愛して下さったその神の「働きかけ」に対して自己の責任をもって主体的に応答し、神との正しい関係に入ることを神によって誘われているのではないだろうか。――もっとも、クリスチャンの中にはこのような観点を否定する人も多いだろう。しかし、聖書を読めば明らかなように、神は人間と無関係に存在される方ではない。もちろん神は人間をはるかに超越する存在ではあるが、その超越は先に考察した意味における超越であって、その意味で神は人間を離れては存在されず、人間に関わり続ける、関わり続けることをやめないお方なのである。もしも神が人間と無関係に存在される客体的な存在だったならば、この世に御子を賜ることなど決してなされなかったに違いない。その神の似姿として創られた（造られたではない）人間が、不完全ながらも他者と真剣に関わることを神によって望まれていることは明白と言うべきであろう。「行って、あなたも同じようにしなさい。」（ルカ 10：37 ）とキリストがわれわれに対して命じられているとおりである。いずれにせよ、宗教的（霊的=実存的）な在り方を離れた人間の存在の仕方はそもそもありえないのであって、そのような存在は無に等しいのである。わたしはそのように理解し信じている。

2：批判の動機――自己目的化した批判とならないために――

議論が少し専門的になった。話を元に戻そ　　う。

はじめに―本章における議論の前提として―

矛盾した発言に聞こえるかもしれないが、わたしが上記その他でいくらか批判の意義を強調したからといって、ただ批判さえしていればよいと考えているわけではない。

もちろん今までわたしは批判肯定派を自任してきたし、批判に一律に否定的な態度を取る人たち（不思議なことに批判的な言動に対して逆に批判してくる人が目立つ）に対して、それこそ否定的な感想をいだいてきた。それは今でも基本的に変わらないのだが、ネット上における昨今のさまざまなやりとりなどを見て、最近その考えを多少改めたことも事実である。というのも、批判肯定派を含む多くの人たちが、（大概は無自覚であることが多いようだが）実際は批判を中傷ないし冷笑と混同していたり、あるいはその批判が単に自己目的化している様子をたびたび目の当たりにするに及んで、批判に対する考えを多少改めるようになったからに他ならない。

いずれにせよ、自己目的化した批判ほど無意味なものはない。それは非生産的な行為だし、そんな態度による議論からは何か建設的な結果をもたらすことはないとわたしは固く信じている。それは対話の精神からはるかに逸脱した行為だと言ってよいであろう。

ここで念のために断わっておくが、わたしは誹謗中傷や冷笑（disrespec）を批判とは見なさない。よって、ここで考察の対象にしているのはあくまでも対話の要素を満たしたありうべき批判、コミットメントとしての批判である。つまりわたしは、批判を安易に誹謗中傷や攻撃的行為と捉える立場やその姿勢を強く批判しているのである。

最近「議論の最終目的は相手を論破することではない」とする意見を時に見かけるが、後述のとおり、それはまったくもって正しい主張である。然るに最近の議論（ディベート）においては、論破した上で、その相手を中傷ないし冷笑することをもって最終目的としているのではないかとすら思える言動が目につくようになった。この風潮には強く懸念を感じざるをえない。本頁における批判行為（誹謗中傷と混同された限りでの）に対するわたしの批判もその趣旨でなされたものなのである。

くりかえすが、わたしは批判そのものを批判しているのではない。批判を誹謗中傷と混同したり、あるいは批判を相手に対する攻撃と見なす立場、その限りでの批判を批判しているのである。それに加えて、批判肯定派を自認しながらも、一部で批判を上記のように考えて相手を冷笑し、あるいは相手を攻撃する手段として用いている人たちに対して、わたしはこれを強く批判するものである。自分が見下した、あるいは見下したい相手を冷笑したりする手段は批判でも何でもない。そんな動機でなされる行為は、批判などという名で呼ばれるにふさわしくない。それは何か高尚なものに見せかけた「攻撃」でしかないのである。少なくともそれは本頁で言うところの対話としての批判ではないと言わざるをえないであろう。もっとも、これらは当人も無自覚で行なっている場合も多いとは思うが、このような批判に対する誤解に対して、わたしはここで問題提起をしたいと考えている次第である。

(2-1) 批判の動機――動機があれば何でもよいというわけではない――

わたしは先に、批判も対話的アプローチでありコミットメントだと捉えていると書いた。対話は自分が変わることも引き受けて行なわれる、要するに自他の生き方を問う*実存的な*行為であるとも書いた。それだから、自分の意見が変わることを怖れる人、あるいは拒否する人に対話ははじめから不可能なのである。さらに、対話的意図ないし何らかのコミットメント（対象に対して踏み込むこと、ないし相手に対して本気で関わる姿勢）もなしにその対象を一方的に非難ないし攻撃しているような人がもしもいるとしたら、それは批判というよりは「攻撃」と捉えた方がよい。その手の攻撃的な批判をする人は相手に対する敬意などおよそ持ち合わせていないことが大半だろうし、自分が間違う可能性、あるいは自己変容の可能性も拒否している人が多いように思う。しかも最近気がついたのだが、これは非論理的な人に見られるばかりでなく、意外なことに、論理的な人、あるいは論客と呼ばれるような人にも見かけられる態度でもあるようだ。

論理的であるか非論理的であるかに関係なく、日本人は批判を嫌うと言うよりは、対話そのものを嫌っている、ないしは苦手としているのではないか。しかもそれに加え、批判をする当事者が批判対象に対して敵対意識を持っている、あるいは持ってしまうことが意外と多いのではないだろうか。最近わたしはそのように思うようになった。しかしながら、自己変容の可能性に開かれていない対話、あるいは自己批判の契機を欠いた他者への一方的な、しかも敵対的意識をもっての批判は、結局は批判対象である相手と自分たちという「敵味方」図式をもたらすだけである。それは容易に自己の立場の絶対化を招来する結果となる。身内以外の人間に何か言われたら反射的に敵意をいだく、などというのもこのパターンだろう。たとえ意識的ではないにしても、相手に対して何らかの敵対感情を持っていては、建設的な批判はおろか、対話などもとより不可能である。相手（対象）に対する誠実さや他者に対する敬意がないところに対話的関係はおよそ成り立ちようがないのである。

もちろん対話は真剣な態度で行なわれなければならないし、その意味で批判もまた真剣勝負であることは論を俟たない。コミット（自己投入）を欠いた批判は無意味である。しかし、だからといって相手を無闇に攻撃してよいというわけではない。ところが、中にはそこを履き違えて、批判対象をただ徹底攻撃しているだけの人も多くいるようだ。「罪を憎んで人を憎まず」と言うが、批判とは本来その人の思想なり行動に対してまずは疑問を呈する行為であって、その意味で行なう相手に対するチャレンジなのである。そのため、時にはその人の姿勢、ひいては生き方そのものが吟味の対象になることもあるだろうが、その時も相手の人格攻撃をしてしまったのでは意味がない。もしかして自分の行なう批判が単なる個人攻撃になっていないかどうか、常日頃から自らを省みることも必要だろう。対話の精神を欠いた一方的な批判は無意味だということをわれわれは忘れてはならない。

次に、本来生産的であるべき批判的アプローチ（対象へ迫ること、働きかけ）が不毛なものとならないためにも、批判を行なう側の「動機」――つまり、**“どんな目的でその対象を批判しているのか”**といった「反省」は極めて大切な視点となる。もっ

とも、その人の批判の意図が自分の考えないし立場をよりハッキリさせることのみであってもとりあえずは構わないと思うが、しかし、その人がいつまでもそこにとどまっていた場合はどうか。それでは、その批判行為が自己目的化してしまう危険を免れない。このような「自己肯定のためだけの他者否定」という姿勢に終始していては批判が一方通行にしかならない。このような一方的な論難と言うに等しいアプローチで他者との間に批判的ながら建設的な対話が生まれるかと言うと、これは土台無理な相談だと言わざるをえない。大体そんな態度を取っておきながら相手が心を開いてくれることを期待する方がおかしいので、そんなやりとりに何らかの生産性を期待すること自体が無理というものなのである。それに、そのようなタイプの批判ないし否定しかしない人は、他者を自己の存在証明の道具としてしか考えていない可能性もある。それでは建設的な対話はおよそ不可能だし、対話を通した真の意味の自己変容も起こらないだろう。そのような陥穽から抜け出すためにも、わたしたちは常に他者に敬意を払い、批判の建設的かつ生産的な意義を追求し、対話的な批判を心がけるべきなのである。

(2-2)「敵味方」図式のもたらすもの―動機さえあれば何でもよいというわけではない―

上記とも多少関連するが、中には自己証明のための批判のひとつの形として、自分の攻撃欲求や鬱憤を晴らすために、批判の対象（スケープゴート）を探してあれこれ批判をしているだけの人もいるかもしれない。けれども、そんな人に他者を批判する資格はないので、もしも何らかのフラストレーションがたまっているのなら、スポーツなり趣味にいそしむなりして、よそで発散した方がよほど生産的だと思う。当人は、多くは無闇やたらなその批判行為が何か知的で高尚なことであるかのように考えているのかもれないが、実際は心理学で言うところの合理化を行なっているにすぎない（それでも多少のストレス発散にはなるだろうから、当面の間はそれでも構わないかもしれないが、そんなことを続けていてはその人の精神にとっても決してよい影響はもたらさないだろう）。そのため、この手の人がたとえ自分たちと同じ対象を批判し、あるいは自分たちと同じような発言をしていたとしても、それだけをもって自分たちの「仲間」としてこれを遇してよいかとなると、それははなはだ疑問だと言わざるをえないだろう。その人の批判の目的が、ただ当人の攻撃欲求を満足させたくてスケープゴート的に相手を批判しているだけなのか、あるいはその批判に何らかの建設的な意義があるのか。これを区別せず、同列にあつかうことはできないはずだ。然るに世間では、同じ対象を批判している、あるいは同じことを主張していているからといって、相手の人間性などお構いなしに、その人たちをそのまま安易に仲間あつかいすることがよく行なわれている。そのような対応も時には必要なことがあるだろうから、わたたしもそれら（たとえばデモなどに見るような集団での意思表示といった行為）を一概に否定するつもりはない。けれども、他者に対する敵意や攻撃を主目的としたような人物を積極的に仲間として迎え入れた場合、批判対象となる相手はもちろん、それ以外の人たちからも毛嫌いされて、かえって自分たちの所期の目的を達成する障害となる危険性も否定できないのではないだろうか。それは「徒党」ないし「野合」であって、

同志や盟友と呼べる存在では決してない。たとえばリベラルな立場の人たちは、自分たち好みの発言をする人なら、たとえそれがどんな凶悪犯であろうが、あるいは暴力団の組長であろうが、彼らを無批判に受け入れてしまうようなところがあるが、これなどそのよい例と言ってよいだろう。

そういった次第で、その当人の動機を無視した安易な仲間あつかいは、ひいては単なる「敵味方」図式をもたらし、自分たちに異論を差しはさむ人間に敵意をいだく、そんな危険性を否定できないと思うのだ。それは、身内（仲間）の言うことはあくまで正しく（間違っていても無意識に擁護し）、反対者ないし部外者の言うことはすべて間違っている――それどころか、相手が正しいことを言っても評価しない、などといった態度を招きかねない。相手を敵と味方とで分ける視点はこのような落とし穴があるのである。これはわたしも含め多くの人が経験していることであろう。それは人間の弱さでもあると思う。

(2-3) 他者否定を通しての自己証明とその問題点

実は、話は少し脱線するが、実は唯物弁証法に関する一般向けの本にたまたま目を通していて、「他者の否定を通してしか自己を証明できない」という上記の問題に気づかされた。その本は戦後間もない時期に出た一般向けの新書本なので仕方がない面もあるのだろうが、マルクス主義以外の考え方を批判するのはよいとして、そればかりが書き連ねてあるという感じなのだ。これは他の人が書いた弁証法入門書でもかつて感じたことなのだが、非常に観念的と言うか、教条的で独断的に感じるし、実際、説得力というものがまるで感じられない。このようなアプローチないし態度では批判が一方通行でしかないし、そんなやりとりに生産性を期待することは不可能である。「自己肯定のためだけの他者否定」が不毛であると思うゆえんである。自己が信奉するマルクスやレーニンの理論は絶対だという一種の「信仰」が彼らにはあるので（マルクス主義ばかりでなく、何らかのイデオロギーの信奉者はみな同様である）、自分たちとは違う立場の思想を受け入れる（ないしは、それらの思想を公正かつ客観的に検討する）心の余裕がないのだろう。それに加えて、はじめから彼らは自他の変容を伴う真の意味の対話的批判を行なう気持ちも持ち合わせていないのかもしれない。

これは何も共産主義陣営や何らかのイデオロギーの信奉者の間にばかりある問題ではない。たとえばキリスト教の入門的な書籍でも、キリスト教以外の思想や他宗教を批判しながらキリスト教の優位性を証明しようとするタイプのものがいくつもある（このような形でしか自己の信仰の優位性を証明できない人は、よほどその信仰に自信を持てない、信仰の弱い人なのだろうと最近は思うようになった）。そのようなアプローチがすべて無駄だとまでは言わないまでも、わたし自身はそれらの本を読んで説得力を感じられない。いや、それ以上に独りよがりな印象しか受けないのである。しかし、「それはあなたがキリスト教ないしイエス・キリストを受け入れていないからだ」という反論はここではあまり意味がない。他宗教などに対するこの手の批判的な言及は、すでにキリスト教の信仰を得ている人には多少は有効かもしれない。だが、もしもその著者がその手のアプローチを採

用した意図が未信者にもキリスト教の有効性を証明したいと考えてのことだったとしたらどうか。残念ながらその試みは成功していない――いや、かえって逆効果でしかない。そのような一方的な論難と言うに等しいアプローチで他者（読者を含む）との間に批判的ながらも生産的な対話（＝関係）が生まれるかと言うと、これまた無理な相談だとわたしは思うのだ。

(2-4) 間違った思想や主張には最初から否定的な態度で臨むべきか？

言うまでもなく、世の中には、人間として容認することのできない、非人間的としか言いようがない思想がいくらでもある。排外主義やヘイトスピーチ、人種差別発言などはまさにその好例だが、それらは「対話」と言うよりは「対決」する以外ない思想であり主張である。ただ、たとえそのとおりだとしても、その思想がまだ海のものとも山のものともつかぬ場合、これを頭から拒否することはあまり建設的な態度とは言えないのではないか。それというのも、たとえその思想ないし主張が個人的にどうしても受け入れ難いものだったとしても、その思想なり主張についてこれをよく知るよう勉めるくらいのことはできるはずだからである。然るに、わたしを含め多くの人がそれをサボっているように思うのだ。その思想なり主張が単に気にいらないから、あるいは間違った思想ないし主張だから（「アカだから」「右翼だから」、あるいは「新興宗教だから」等々）と決めつけて、これを一方的に切り捨て、反論があってもまともに相手をしないことが多いのではないだろうか。これでは、それがたとえどんなに間違った思想および主張であっても、かえってこれに有効に対抗する機会を失してしまう危険もあるのではないかと思う。

相手との真摯な態度による対話もなく、身内だけで理解し合っているだけでは物事は動かない。これが多くリベラルな人たちが市民運動その他で敗北してきた要因のひとつなのではないかと思う。彼らの主張には個人的に共感するところも多いのだが、意外と一般人に受け入れられないばかりか、最近では毛嫌いされることも多いのは、どうもその辺に原因があるように思えてならない。彼らは仲間内でしか通じない「身内言語」には長けていても、一般人の心にまで訴えかける「共通言語」を持っていないようだ。より正確に言えば、その「身内言語」自体が彼らの所属する世界では共通言語でもあるため（かつてはその「身内言語」が世間一般でもある程度通じた時期があるため、なおさら厄介なのである）、もっと広い世間ではそれがひとつの身内言語に過ぎないことに彼らは想いが及ばないのかもしれない。真実の他者、自分が話しかけるべき目前の相手が見えていないという点で、彼らの主張は所詮は独りよがりでしかない。実際、彼らの批判がほとんど「冷笑」で占められていて、お互いそのような皮肉や冷笑に対して身内だけで喝采を送り合っている、あるいは溜飲を下げているだけという、そんな図式が大半である。こんな態度に終始していては、相手がこちらの主張に納得するわけがないが（そんなことは子どもにでもわかる！）、上で述べてきたほんとうの意味での対話がそこには存在しないのだから、それも当然の結果だと言ってよいのかもしれない。

それに対して、相手ないしその思想または主張を無闇に攻撃するのではなく、相手に対する敬意を失わずに真摯な態度で誠実

にやりとりをすれば、少しはよい結果を生むのではないか。むろん完全にはわかりあえないまでも、その相手が自分の考えを多少でも改める可能性がないとは言えない。たとえ相手は全然変わらなかったとしても——たぶんその方が圧倒的に多いだろうが——それでも対話の意義がないとは言いきれない。それというのも、その議論を見ていた人が自分の考えを修正し、あるいはその問題について自分の考えを深めるよすがにはなるかもしれないからだ。たとえ無駄と思っても、チャレンジする価値は否定できない。人間関係において、そして対話において決めつけは御法度なのである。

(2-5) 最後に—批判と非難の相違について—

上記と関連するが、ここで念のために補足しておきたいことがある。それは、わたしは上で批判は誹謗中傷とは違うと散々指摘してきたが、それに加えて批判は非難や攻撃とも違うことを改めて指摘しておきたい、ということだ。これはわざわざ言うまでもないことかもしれないが、批判と非難は違うからと言って、それでも誹謗中傷と非難を同一視することはできない。

上でも触れたように、人間として、あるいは個人としてどうしても容認できない主張がこの世には存在するし、それらの主張や思想には対決する以外に道がないことも多い。そのような場面を想定した場合、相手を批判する時に、それは往々にして「非難」という形を取らざるをえないこともある。このように、批判と非難とは時に区別しがたい側面が多い。

たしかに相手を一方的に非難ないし批判した場合、そこに対話的なやりとりは成立しにくい。特に非難した相手からどんな反論があったとしても、ほとんどそれを顧みず、こちらも多少でも意見を変えるつもりがないだろう。また、相手とのやりとりから何らかの啓発を受けることも、そのつもりもないに違いない。その意味で非難は「対話的」とは言いがたい。けれどもその非難が、相手の主張に対して異を唱えるために相手との関係にあえて割って入ること、すなわち相手の思想に対して「踏み込む」行為であった場合、それはその相手に対してコミットする行為だとも考えられる。その限りで、それもまた対話的な挑戦（チャレンジ）、アプローチであることに違いはないのである。

このように批判と非難は区別しがたい面があるわけだが、これをわかりやすく言えば、批判と非難にはグレーゾーンが多いということになる。現実ではこの両者は区別しにくい側面が少なくないかわけだが、それならば、なおさらこの両者を区別して理解しておいた方がよいとわたしは思うのだ。

そんなわけでわたしは、どんな相手に対しても対話的な姿勢で、誠意を持って批判を行なうよう心懸けるべきだと思うのだ。相手を非難した場合は特にそうだが、その場合は相手からかなり攻撃的な反応が返ってくるに違いない。それはこちらも、しかも最初に相手に対して攻撃的な言動（批判もそうだが、非難の場合は攻撃と捉えられても仕方がないし、やはりそれは相手にとっては攻撃なのである）をしたのだから当然であって、そのことに対して腹を立てるべきではない。そして、その相手からどんなに容認しづらい、あるいは攻撃的な反論が返されたとしても、（下で引用する文章の中で青野も言うように）それらの異論や

攻撃的な言動に対して、こちらはただ淡々と反論してゆけばよいだけのことなのである。（こちらに対して相手が最初に攻撃的な言動をしたきた場合もそれは同じである。わたしたちはそれに対して淡々と、かつ誠実に応対すればよいだけのことである。たとえそれがどうしようもない暴言であったとしても、こちらが同じように暴言を返してよい謂われはない。その場合は、ただスルーすればよいだけのことである。）

3：批判する者の姿勢と態度―その覚悟と責任―

以上、批判する側の動機面に焦点を当てて考察してきたが、今度は批判する側の相手に対する態度、また、それに伴う議論ないし対話の姿勢といった側面に焦点を当てて考えてみたい。

(3-1) 他者からの批判・反論の必要性

前掲の著書の中で青野は、批判を非難と混同し、人間関係を台無しにする行為として批判的行為を頭から否定する心理臨床の専門家を批判して、《仮にこの批判が非難であったとしても、そのなかに傾聴すべき点はないかどうか吟味すべきなのであり、また、それが理不尽な主張であったのならば、それに冷静に反論してゆけばよいのであって、関係を絶ってしまってはならない》[*1] と書いているが、これはわたしたちも心しなければならないことである。それだから、相手からの批判なり反論なりがたとえどんなに的外れなものであったとしても、その反論をもたらしたものが少なくとも自分の発言に由来するものであるならば、その批判には真摯に向き合うべきだとわたしは考えている。

わたしは先に対話とは自他変容の可能性を秘めて行なわれる行為だと書いた。人は一人では生きてゆけないと言われるが、厳密に言えば、一人で生きている人間などこの世に存在しない。われわれは相互的存在であって、その意味で人間は他者を通しての存在なのである[*2]。われわれは他者を通して、すなわち他者との真剣な関わり（コミットメント）の中で自己を知ってゆく存在である。そこに対話の意義がある。大体、自分のことは自分ではわからないもので、だからこそ他者と真剣に関わり、そのやりとりを通して自己を知る作業が必要となる。より深く自己を知り、自分の立場や考えをより明確にするためにも、批判を含む他者からのアプローチやチャレンジがわれわれにはぜひとも必要なのだ。したがって、他者から何かチャレンジを受けたら、それを直ぐに否定なり拒否するのではなく、その批判の意味を考え、時間をかけて応答すべきであろう。それに対して、もしも他者からの反論や批判を拒否する姿勢で終始す

*1 青野『どう読むか、聖書』、p.143.

*2 レミ・C・クワント『人間と社会の現象学―方法論からの社会心理学―』早坂泰次郎監訳、勁草書房、1984 年 6 月、特に第二章を参照。

るとしたら（それは対話拒否の姿勢でもある）、先にも述べたように、その人はせっかくの自己変容のチャンスをみすみす逃していることになる。

(3-2) 対話のストレスから逃げるな―逆批判・反批判に対して拒否反応せずに―

それに加えて最近わたしが気になるのは、自分はあれこれ批判をしていながら、いざ相手から反論されたり何か言われたりすると、その途端に腹を立てるような人物がよく見られることである。あるいはかなりひどいことを相手に言っておきながら、相手から少しでも反撃されたりすると、「心外だ」などと言って立腹するような手合いも見かけるが、これも同様である。いつも思うのだが、このような人物は、自分の発言に責任を負えない、あるいは自分の発言に対する覚悟がない人なのだろう[*1]。

わたしの経験上、この手の人はやりとりをしている最中にいきなり切れてしまうことが多いのだが、これはあまり論理的でない人に多く見られる反応である。だが、意外に思うかもしれないが、論客として自他共に認められているような人にも、このような攻撃的な行動を取る人が少なからずいることに最近気づかされた。批判を嫌うのは何も非論理的なタイプばかりでなく、実は意外と論の立つタイプの人の中にもその手の人がいるらしいのだ。それもかなり多いのではないかと思う。前者と違って後者のタイプは、周囲の人間も――場合によっては自分すらも――そのことに気がつくことは難しいように思うが（そのむずかしさは、われわれには「知的な人の方が人間的にも成熟しているはずだ」というあまり根拠のない思い込みがあることにも由来しているのではないかと思う）、このタイプはわかりにくいだけにかえって厄介かもしれない。そのような人は相手を論破することは得意だが、まさか自分が実際は（他者による）批判を嫌っているのだとは思いもよらないのだろう。彼らが好んで行なっている批判は、あくまで批判とは名ばかりの応酬にも近いやりとりであって、それに対して彼らが嫌っているのは、厳密に言えば対話なのであろう。頭がよいこともあってか、彼らは時間のかかる対話的なやりとりを嫌っているのかもしれない〔補説1-4〕。

補説1-4：対話のストレスに耐えられない日本人

劇作家で演出家でもある平田オリザによると、日本のような均質社会（＝和社会）ではない欧米社会では、どんな細かいことでも、共通認識を得るための議論が納得のゆくまで延々と行なわれる。ところが、多くの日本人はそのようなやりとりに耐えられず、おおよそ30分でキレてしまうという。このようにいきなり本論に入りたがる日本人を平田は「効率ばかり求める」と言うのだが〔注2-7〕、これは彼が演出家なるがゆえの発言だろう。というのも、平田氏が関わる演劇や国際的なワークショップといったものは、一般のビジネスと違って何をするにも初めてのことばかりで、すべてをゼロから創り上げてゆかざるをえないものが大半だろうからである。その反面、ある程度の

*1 後述「批判する者が持つべき責任と覚悟」参照。

共通認識がすでにできあがっている通常のビジネスにおける打ち合せでは、日本人はなかなか本論に入ろうとせず、延々と世間話をすることでもよく知られている。欧米のビジネスマンには逆にこれがストレスになるわけだが、これを非効率と言わずして何と言おう。両者は一見矛盾して見えるが、しかし、そのどちらも日本人に特徴的な姿である。多少単純化した言い方ながら、これは、日本人が対話などに伴う心理的ストレスに極めて弱い自我をその長い歴史の中で育んできたことが原因ではないかと思う。だから、平田氏が経験しているような細かい議論が必要なシーンになると、日本人は今度は逆に「効率」を求めていきなり本論に入りたがるのだと考えられる。上記で触れたことにも関連するが、論客と言われるような頭のよい人たちもそこは同様だと思うのだ。ディベートならともかく、悠長な議論なり対話を彼らが嫌うのも、一見効率的に見えて、実は対話のストレスに耐えられないという心理的な弱さがそこに控えているがゆえのことなのかもしれない。

注2-7：平田オリザ『わかりあえないことから――コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書、2012年10月、その他参照。なお「和社会」という表現は、高際弘夫『日本人にとって和とはなにか――集団における秩序の研究』(*商学研究社・1987年、白桃書房・1996年）で用いられている表現を借用した。本書の著者もまた日本に特有な「和社会」のシステムをある意味で「効率的」としていることに興味深いものを覚える。さらに、和社会においては「友情」が忌避されるという同書の指摘も興味深いものがある。

次に上記と関連するが、先にわたしは知らないことを批判することの無意義であることを指摘した。しかし、上記のような相手を論破することしか考えていないような手合いが、たとえ自分のよく知悉する分野に関する批判行為を行なっていたとしても、そのやりとりは必ずしも有意義であるとは言えないのではないかと思う。というのも、もしもその人が相手を論破することだけを目的としてさまざまな知識をインプットしているのだとしたら、その行為にわたしはあまり意義を認められないからである。恥ずかしながら、実はわたしも「議論において優位に立つがために知識を増やしたい」という欲求にかられることが時にある。本を読むのが人よりもかなり遅いわたしは、そのような目的でのみの読書をしたことは幸いにしてほとんどないのだが、可能ならば読書を通してそのような知識のインプットを行なってみたいと思うことはよくある。しかしながら、これだけは肝に銘じておかなければならないが、勝ち負けだけを目的として得られた知識でもって自他の生を真に豊かにすることは望めない、ということである。それは、相手はおろか自己の人間的成長にも何ら資するところのない死んだ知識でしかないのである[*1]。

*1 谷口隆之助『存在としての人間』I.P.R 研究会、1974 年 3 月

くりかえすが、批判にしても何にしても、その行為の先にあるものが何もないのならば、その行為は無意味であるとしか言いようがない。相手を論破して、その後、**何を・どうしたいのか**。その視点が欠落しているならば、その議論および批判は不毛な結果をしかもたらさないだろう。

(3-3) 批判する者が持つべき責任と覚悟

少なくとも日頃から批判の意義を主張し、なおかつ批判的行為を恒常的に行なっているのならば、相手からの反論は覚悟しなければならない――いや、それ以上に、そのような応答はこれを喜んで受け入れなければならないはずである。これは批判ばかりでなく、対話を行なおうとする者の責任であり覚悟であると言えよう。

別な箇所でも簡単に説明したとおり、責任は英語で言えばresponsibilityで、これはresponseとabilityとに分解される。要するに責任とは「応答可能性」、すなわち（相手に）応答する能力の有無を問う、そんな語なのである。それだから、他者からの批判（アプローチないしチャレンジ）に対して拒否の姿勢しか見せない――言いかえれば、そのアプローチなりチャレンジに対して真摯に応答する気がはじめからないのならば、当然その人の批判は不毛なものとならざるをえない。散々やりとりをした結果そうなるのならば仕方がないが、最初から他者を切り捨てるような態度で批判行為を行なっているのならば、その批判に意義があるとは言いがたいだろう。もしも「レベルの低い反論をしてくる相手とは数回のやりとりすら面倒だ」というのならば、その人は人前での一切の発言を止めて、誰もいない部屋で独り言でも呟いていればよいのである。（その手の人の中には、何か言ってくる相手に対して「叩く」などという表現を平気で使っている人も多く見受けられる――いや、ハッキリ言って、「叩く」などという言葉を常用している人は、どんな人であれ批判と誹謗中傷の区別がついていない人間だと判断して間違いないだろう。）

いずれにせよ、批判なり反論なりをして、それに対して誰かから何らかの応答があったならば、これに誠実に答える義務なり責任なりがこちら側にはあるのだということを忘れてはならない。時に勘違いをしている人がいるが、それがどんなに稚拙な反論だと思っても、こちら側はこれに誠実に応えてゆけばよいだけのことである。ただし、誤解のないようここで申し添えておくが、反論する側、批判をよこす側に何の責任もないなどと言っているのではない。相互存在としての人間にとって、対話と同様、責任もまた相互的なのである。（ただし、それが単なる言いがかりや明らかな攻撃でしかなかった場合は、そのような相手は単に無視すればよいだけのことである。それは当然のことで、わざわざ説明するまでもないのだが、中にはそんなこともわからない人もいるようなので、念のためにここで指摘しておくことにした。中には誰かから一度何か言われただけで、それを反射的に攻撃と判断する向きもかなり多いように見受けられるので、あえてくりかえし指摘している次第である。）

最後に

先に[*1] 批判の意義を強調したのと正反対の主張に聞こえるかもしれないが、以上の理由で、自己目的化した批判はすべきではないし、批判をするならば自分が批判されることを忌避すべきではないとわたしは考えている。「批判をするな」というよく聞かれる“批判”にしても、この意味で言われるのならばそれは正しい主張だと思う。いずれにせよ、深く考えれば考えるほどその思索は深まり、次第に変化する。こうやってわたしも、10数年前と比べて徐々にその主張を変化させてきているわけである。

以上のような次第で、わたしが言う批判的アプローチは、上記で述べたような不毛な「攻撃」ではなく、あくまで創造的かつ建設的な行為としてこれを行なってゆきたいと考えているのである。

4：議論の姿勢―議論の前提として心懸けるべきこと―

はじめに―対話とディベート―

ここで少し観点を変えたい。

以上いろいろと述べてきたわけだが、本頁においてわたしは、批判のあり方にとどまらず、議論のあり方ないし対話の姿勢を終始問題にしてきたように思う。そのため、本来はここで正しい議論や対話のあり方について本格的に論ずるべきなのかもしれない。しかし、本頁もかなり長くなった上に、この問題については本格的に論じたいと考えているので、議論のあり方や対話の精神の問題についてはいずれ別頁で詳細に取り上げることにした（ここではその内容についてなるべく簡単に触れるにとどめ、いずれ折を見て、前頁と同様に本節でその内容を要約的に記すことにしたい）。

なお、くりかえしになるが、わたしは何も論理的であることを否定したいわけではない。ましてや非論理的であることを是としているわけでもない。ここは誤解してほしくないのだが、結論を多少先取りして言えば、わたしはロジカル・シンキングを前提とするいわゆるディベート型の議論の一面性に疑問を呈しているのだ。

ディベートは通常、論争相手の説得なり論破を最終的な目標として行なわれる。その限り通常のディベートにおいては、相手の存在は、無視とは言わないまでも、少なくとも前提されていないと言ってよい。何となれば原理的に言って、ディベートにおいては、議論する相手がかけがえのない誰かである必要は必ずしもないからである。わかりやすい例をあげれば、対話は基本的に機械相手には行ないえないが、そう遠くない将来、とても優秀な人工知能が開発されれば、人間相手に簡単なディベートくらいならばできるようになる可能性は否定できない。それに対して、対話が自他の変容を賭して行なわれる行為である限り、対話（議論）によって、たとえ相手を説得ないし納得させることができなくても構わない、お互いに対話を重ねることにこそ対話の意味があるのだ。対話することによって、お互いが自他

*1 前章および本章第 1 項参照。

の価値観の違いに気づき、あるいはお互いが自分の考えをより明確にすることができたら、その時点で対話の目的はいちおう達成されたと言える。ましてや対話においては論破など最初から目的にしていないし、相手を説得ないし納得させることも二次的な目的にすぎない。ディベートにおいてもその経緯（プロセス）は当然重視されるだろうが、目的はあくまで相手の説得ないし論破にある。それに対して、対話においてはその過程（プロセス）にこそ意義があるのだ。議論はもとより批判も対話という視点で捉える立場、そして批判をコミットメントとして捉える立場からは、ディベート型の議論はそもそも前提にできないのである。議論にも対話型のそれもあれば、ディベート型のそれもある。本論の立場が前者にあることは言うまでもないので、そういった観点からわたしは本頁での議論を進めているのである。

(4-1) 変化を怖れずに―議論の前提として心懸けるべきこと(1)―

ここでまず誤解のなきよう申し添えておくが、わたしは何も批判行為あるいは反論を行なう当事者が論理的であるとかないとか、あるいは論が立つとか立たないとかといったことを問題にしているわけではない。およそ論理的でない人に有効な批判的行為ができるとは思えないという人もいるかもしれないが、問題はそういうことでもない。わたしが言いたいことは、われわれ当事者にそもそも **“対話の姿勢があるかどうか”** が問われているのだということなのである。論理的であるかどうかはそこでは本来無関係である。わたしに関してもそれは同様で、上で述べた対話的な姿勢でキリスト教にアプローチするのでなければ、このサイトをアップした意味もあまりないと考えている。

本サイトにおいては、今のところはわたしが個人的に違和感を覚えるキリスト教の思想等に対してかなり一方的に批判的なアプローチを行なうことになるが、それでも他者からの批判を拒否しているわけではない（今は掲示板を設けていないが、いずれもう少しサイトが充実してくれば、折を見て掲示板の設置を予定している。それまではメールで意見や批判をお受けしたい）。

批判を含む意義のある対話を行なうためにも、自分とは違う立場の思想や宗教に対する敬意ないし真摯な態度が*お互いに*より必要となる。そして、お互いに相手をよく知り、なおかつチャレンジし合う精神が何よりも要求される。至らない点があればこれを改める勇気も必要だろう。自己の信念が少しでも変わることを怖れていてははじめから対話は不可能なのである[*1]。

(4-2) 相手に誠意をもって対する―議論の前提として心懸けるべきこと(2)―

本頁において、わたしは今まで相手に対して敬意を持って接することの大切さを強調してきた。しかし、「敬意」という表現を多用しながらも、若干の疑問をいだいてていたことも事実である。というのは、敬意を持てないような相手に対しては議論など無意味だと感じる人も多くいるだろうからである。本頁冒頭でも書いたように、「批判という言葉では誤解を招くの

*1 次文書「『神を怖れよ』という福音」中の変化への怖れに関する議論を参照。

ではないか」と疑問を感じるようになったのと同じく、敬意という表現だけではわたしが言いたいことはうまく伝わらないのではないかとわたしも最近思うようになった。

わたしはこのことに関しては次のように考えている。簡単に言えば、それは、**“何に対して敬意を払うか”**の視点の違いであると言えると思うのだ。

わかりやすく言えば、敬意には、相手の能力に対する敬意（「条件付き」の敬意）と相手の存在そのものに対する敬意（「無条件」の敬意）の二種類があるとわたしは思っている。もちろん後者の敬意こそが大切で、わたしにとってはそれこそが対話（批判を含む）の基本なのだ。また、能力に対する前者の敬意にしても、その前提に相手の存在そのものに対する後者の敬意があって初めてほんものの敬意になるのだろうし、それでこそ意義のある対話（批判も）――いや、それは対話に限られはしない――も成立するのだと思っている。甘いと言う人がいるかもしれないが、わたしはそれこそが対話の基本精神だと信じている。

何かが優れているから尊敬するということは、基本的には誰にでもできる。それは「条件付き」の敬意である。そういった尊敬できる何らかの能力（それがまだ潜在的な能力であったとしても）を有した相手に対してしか敬意を払わない、という人も多くいるだろう。しかしながら、こういった態度は結局、能力のない奴は評価しない、切り捨てる態度だと言ってよい。しかし、そのような態度では（自分より劣っていると判断した相手との間に）実りのある対話は成立しない。そのことをわたしたちは忘れてはならないと思うのだ。

そういった次第で、最近わたしは対話相手に対する敬意よりも先に、今後は「誠意」を重視するアプローチがよいのではないかと思うようになった。これもかなり形式的になる危険性はあるものの、まずは何事も丁寧にかつ誠実にやりとりをするようにすることを心がけたらよいのではないかと思う。

当然ながら真剣な議論は激しい応酬を伴う。しかし、そのような激しいやりとりの中でも、相手に対する最低限の礼儀を忘れず、誠意をもって相手に対することは決してむずかしい話ではない。それができないと言う人がもしもいるとしたら、その人には議論そのものがもともと無理なのだと判断して間違いないだろう（もっとも上でも指摘したように、形式主義的な議論のノウハウを駆使すればその手の人にも議論は可能になるだろうが、そのような人が行なう議論が生産的かつ創造的であるとはわたしには思えない）。

ただし、ここで注意しなければならないのは、多くの人が陥りがちな過ちとして、（ビジネス書などを読んで）形式主義的に形だけの誠意を示すというアプローチを取る人が多い、ということである。対話ないし批判をコミットメントとして捉える視点からは、これは本来ありえない、いや、ありうべからざることである。ただそうは言っても、上で書いたことと矛盾しているように見えるかもしれないが、それでも相手に対して攻撃的な態度に終始するよりは、多少形式的でも良識をわきまえた誠意ある態度で接することは必ずしも間違っているとは言えないのではないかと思う。

以上いろいろと書いてきたが、人間存在に対する敬意を誰に対しても持てるようになるためにも、わたしたちは対象となる相手に対して心から興味を持って接し、あるいはその相手に対して誠実な関心を寄せることに徹することが肝要なのである。わたしはそのように思っている。

(4-3) 相手に興味を持つこと―議論の前提として心懸けるべきこと(3)―

それに加えて、どうしても忘れてはならない視点は、**“その相手に対して関心ないし興味を持てるかどうか”**だという点である。

先にも触れた写真家の橋口譲二が言うように[*1]、社会の底辺にいるような人に接近する場合は特にそうだが、彼らに対して憐憫などの感情を持っていては、その相手から拒否されることの方が多い。大体そんな態度で相手に接しておいて、相手からよい反応が返ってこないことは当たり前なのである。

これは議論その他でも同じことである。その場合、いくら相手に興味(これは悪い意味のそれ)があるからと言って、「お前、なんでこんな馬鹿なことをするんだ？」といった調子で、その相手を小馬鹿にするような態度で接しても、ろくな反応が帰ってこないだろうことは誰にもわかるはずだ(不思議なことながら当人にはその気がないことも多いようだが、相手は敏感に相手の感情を察知するものである。そのような態度は、よくて好奇心と言えるかもしれないが、「ほんとうにその相手のことを知りたい」という誠意ある姿勢とは決して言えないのである)。そんな態度で相手に問いかけても、その相手はその人を無視するか、場合によっては攻撃的な態度を取るに違いない。ところが、そのような態度で相手に接しておきながら、相手から不快な反応を返されて憤慨するというような人が意外と多い。原因は自分にあるにもかかわらず、そういったことをまるでわきまえていない人が最近多くなったように思う。そして、このような態度で普段から人に接しているような人が相手を批判した場合、その人が「事実誤認の指摘をしただけだ」「攻撃したわけではない」といくら言い張ったところで、それは相手からすれば攻撃としか捉えられなくても仕方ないだろう。当人がどう言おうと、あるいはどう思おうと、それは事実攻撃なのである。誰だって小馬鹿にされれば不愉快に感じるのは当たり前である。それが秘めた軽蔑の感情だとしても、人によってはそれを敏感に感じ取り、正直な反応を返しているだけなのかもしれないのである。論理的であることを自認しながら、その程度のこともわからない人がもしもいるとすれば、その人は真に論理的だとは言えないのではないだろうか。

(4-4) 形式主義を超えて―議論の姿勢について(1)―

昨今は何事においても効率が優先される時代である。それは議論においても同じであるようだ。いわゆるロジカル・シンキングやそれに伴うディベートなどにもその傾向がよく現われていると思う。

最近は世間でもロジカル・シンキングが流行っているし、ひと頃に比べディベートやディベート教育も盛んに行なわれるようになった。当然それらについての解説本も多くあるわけだが、それらのごく一部を見ただけの個人的な感想ながら、それらは各種の便利なツール(フレームワーク)を教授するものが多い印象がある。つまり、そういったタイプのロジカル・

*1「(1-4)補論:コミットメントとその意味について」参照。

シンキングは、かなり形式主義的に論理性を担保させるタイプのものであると言えるということである。ところが、わたしも含め世の一般人は論理的思考に対する訓練を受けていない人が大半である。そういった人を相手に論理的思考に基づいただけの、その意味での形式的な議論をしても、あまりよい結果を生まないのではないかと思うのだ。そういった人たちの中には、ロジカル・シンキングのノウハウにしたがって明らかに正しい主張を行なっているにもかかわらず、必ずしも相手が説得されないことに苛立ちを隠せない人も多い。それはわたしも同感ではあるのだが、彼らはその理由を、その相手が論理的思考の訓練を受けていないことに求めることが多いように見受けられる。よく考えてみると、それは、非論理的な人とはまともな議論など不可能だと言っているに等しいのだが、しかし、果たしてそれは正しい見解だろうか？　それがまったく根拠のない主張だとはわたしも思わないが、そういった主張に対してはどこか違和感が残ることも事実である。少なくともそこには論理的思考の訓練を受けていない他者に対する蔑視感情があることは事実だろう。相手が説得されないのは、はたして相手が論理的でないからだけだろうか？　縁あって本論を読んでいる人にも、その辺のことをよくよく考えてほしいと思う。

誰でも知っていることだろうが、論理的でありさえすれば誰もがその人の主張を受け入れるとは限らない。それが人間というもので、相手を説得するには、相手の感情に訴えたり、あるいは何らかの利害に訴えたり、その相手に対していろいろとアプローチするのは当然である。それができない、あるいはする気がないと言うのなら、それは当人の力量が不足しているのだ。少なくとも、その相手を説得するための努力をする意思がその人にないことだけは事実だろう。批判や対話をコミットメント（相手に対して踏み込むこと）と捉える立場からは、そのような姿勢は決して容認できるものではない。それは、目の前の当の相手に対して真剣に対していない証拠でもあるからである。

言うまでもないことだが、論理的であることが間違っているなどというようなことが言いたいわけではない。非論理的であるよりも論理的な思考ができる方がはるかにすぐれている。それは紛れもない事実である。それでは、論理的であることを自認していいる人にとっての問題点は何なのだろうか？　わたしは何を問題視しているのか？

わたしは、そういった人たちの問題点は、自分が論理的に思考するのはよいのだが、相手にも自分と同様に論理的であることを求めるところにあるのではないかと思っている。大体、そのように都合よく論理的な反応をしてくれる人ばかりがこの世には存在しているわけではないのだから、その望みはあまり現実的だとは言えない。もしかすると彼らは、議論をしている目の前の他者の存在を捨象して、議論を自分の脳内で行なう事柄であるかのような錯覚に陥っているのかもしれない。そのような自己完結した議論は、しかし教室内などの形式的なディベートの世界の中だけにしか存在しない。そのような非現実的な期待、あるいはそのような幻想を（知らず知らずのうちにせよ）持ってしまうこと自体が、現実を知らない・知ろうとしないという意味で論理的でないとすら言えるかもしれないとわたしは思うのだ。

そのような自分の思いどおりにはならないことが当たり前の現実世界の中で何らかの議論を行なった場合どうなるだろうか？　これは誰しも経験していることだと思うが、その場合、議論をしている相手が自分の想像を超えた、あるいは自分の想定する論理的な範疇を超え

た反応をしてきて難儀するといったこともかなりな頻度で起こるに違いない。効率化された論理的思考に慣れすぎた人にとっては、そういった相手に対処することにかなり難儀するだろうことは想像に難くない。その結果として、こちらから議論を投げ出してしまうこともあるだろう。しかし、その相手が暴言を吐いたりしたわけでもないのに、こちらが一方的に議論を投げ出すとすれば、それは真の意味で論理的な態度だとは言えないのではないかとわたしは思うのだ。

何度もくりかえし書いているように、人間は一人で生きているわけではなく、そこには相手がいるのである。しかもその相手は自分とはすべての面で違う存在なのだということがこの世の現実なのだから、その相手が自分の思いどおりの反応を示してくれないことは当たり前のことなのである。他者は自分にとって都合のよい反応をしてくれる存在ではない。いや、自分にとって都合の悪い反応をするのが本来の他者なのである。先にも述べたことだが、そういった他者がいてこそ対話（議論）が成り立つのであって、その意味で議論や対話は一人ではできないのだ（ただし、自己内対話ということもよく言われるが、その場合も自己が自己を他者に見立てて自己内で対話を行なっているのであって、それは他者の存在そのものが経験的な事実に先立つ事柄としてもともと前提とされているからこそ行なわれるものなのである）。論理的であることを自認する一部の人は、そのような自分にとって都合の悪い反応をする相手に対して当然敬意など払わないだろうし、切って捨てることも多いに違いない。相手が誠意を持って議論に臨んでいるか、あるいは何らかの正当な理由があって反論なり異論をはさんできたのだとしても、そんなことは無視をする人も多いだろう。これは、その人が（自分が規準とする）論理性の水準を全うしていないからと言って直ちに切り捨てる人が多いということでもある。それでは実りある対話は不可能だ。そのような根気のいる作業に耐えられない人にとっては、本来の意味における対話や議論はもともと難儀な存在だったのではないかということは先に指摘した[*1]。そして、そのような本来あまり論理的でなかった人でもスムーズに議論を行えるようになるためのノウハウが、ロジカル・シンキングやそれに伴うディベートだったのではないかとわたしは見ているのである。

それに加え、このような形式ばかりを重視した議論とそれによる問題の把握では、真の現実を知ることがむずかしいのではないかと思う。というのも、ここでは詳しくあつかう余裕がないが〔これについては、機会があれば次頁作成時に詳細に言及する予定〕、先にも簡単に指摘したように形式主義的な論理によって語られた世界というものは、矛盾に満ちた現実を捨象し整理したものでしかないからである。それだから、自分がいくらロジカル・シンキングに長けているからと言って、あまりに形式的な議論に固執すると、そのような訓練を受けていない、あるいはそれをあまり得手としない相手がいだく違和感や疑問を切り捨ててしまうことになる。生産的たりえたかもしれないやりとりの可能性がその段階で消えてしまうのである。

たしかに論理的でない人には効率的な議論はむずかしいかもしれない。けれども、それが何だと言うのだ。相手が多少非論理的でも、こちらもできる範囲で議論に応じればよいだけの話ではないか。そうすることでお互いに何らかの実りある対話ができるとわたしは信じ

*1「補説 1-4：対話のストレスに耐えられない日本人」参照。

ている。相手が最初から攻撃的であるとか、いきなり暴言を吐いてきたというのならば、切って捨てることも仕方がないだろう。しかしながら、その相手がきちんとした態度で異論なり反論をしてきたのであれば、その相手が論理的であるかないかは、議論や対話において本質的には何の関係もないはずである。

なお、誤解のないようここでも指摘しておくが、暴言を吐くような人は当然ながら論外である。しかし、ここで論理的でないという表現でイメージしているのは必ずしもその手の人物ではない。効率的な議論のノウハウを知らず、あるいは知っていても使えずに、話があちこち飛んだり、時にすっとんきょうなことを言って反論してきたりすることはあっても、悪意まではない人のことを含めて考えている。ところが、その程度の人との議論すら、相手が自分の言うことを納得しないだけで論理的でないと切り捨てる人がいるとしたら、その人の議論に対する姿勢にはどこか問題があると言えるのではないだろうか。それだけならまだしも、相手に悪意まであると決めつける人がもしもいるとしたら、わたしはその人の方が実質的な意味ではかえって非論理的ではないかと思う。

(4-5) 曖昧さに耐える勇気を―議論の姿勢について(2)―

くりかえすが、非論理的な人と議論したりすると、予想外の反論が帰ってきたりしてストレスを感じることが多い。それは事実である。それに、論理的な訓練を受けていない人との間では効率的な議論は成立しにくいということも事実だろう。議論があちこちに飛んだりして、議論も錯綜しがちになりがちになることも多い。そのため、そういった人と時間をかけてやりとりをすることを無駄に思う人も多くいるに違いない。けれども、このような非効率とも見える時間のかかるやりとりは決して無意味ではないとわたしは思うのだ。それを無駄だとして切り捨ててしまうとしたら、それは傲慢としか言いようがない。少なくとも誠意のある態度とは言えないだろう。ちなみに、欲求の五段階説で知られる心理学者アブラハム・マスローは、本来曖昧で矛盾を孕んだ人間存在をその現実のままに記述する態度を真に科学的な態度だとし、そのためには科学者の側に《曖昧さに耐える勇気》が必要だと述べたと言う[*1]。本来曖昧なものを曖昧なままにしておくストレスに耐えられず、効率だけを求めて拙速に白黒をつけたがる態度は、やはり対話の精神からかけ離れたものであると言わざるをえない。逆説的だが、そのような姿勢はやはり真に論理的で理性的な態度とも言えないのだ。昨今そこのところを履き違えている人が大勢いるように思う。これはわたしたちがくれぐれも注意しなければいけない点だと思う。

■5:最後に:対話の姿勢について

*1 早坂泰次郎『人間関係学序説―現象学的社会心理学手の展開―』川島書店、1991 年 4 月、p.105. 本発言の出典はマズロー『可能性の心理学』(早坂訳、川島書店、1971 年 2 月)だが、本書の中にそのものズバリの表現はない。これは翻訳者である早坂がマスローの議論を自分なりにまとめた表現だと言ってよいだろうが、極めて的確な言葉だと以前から思っていたので、この機会に紹介した。

くり返すまでもないが、わたしはここでの議論を、いわゆる議論のノウハウとしてではなく、その精神において、すなわち批判も対話のひとつの形として捉え、この視点からのみ論じてきた。わたしが対話をどのようなものだと考えているかは、この文章の中の説明でもとりあえずじゅうぶん明らかだろう。それでもこの文章を書いているうちに、批判や議論の姿勢ばかりでなく、対話の精神についても考察を深めることは大変意義があることだと思うようになった。さすがに今回はこれ以上書けないが、いずれ折を見て対話の精神ないし意義についても書いてみたいと考えている。その代わり言っては何だが、ネット上のやりとりも含めた議論のあるべき姿について日頃考えていることをコメントしてこの頁を終わりたい。

(5-1)環境の変化の中で

わたしがここで批判および議論の精神として念頭においているのは、実はパソコン通信時代の議論のあり方である。現在その精神を強く引いていると思われるのは、誰もが執筆に参加できるフリーの百科事典Wikipediaの編集精神とそこで行なわれる議論であろう[*1]。あのように侃々諤々(かんかんがくがく)と些細なことにまで熱くなって議論する作法は昨今はもう流行らないと思われる人がいるかもしれない。けれども、逆にこのような精神を忘れつつあることが、ネットにおいて昔以上に要らぬ炎上をもたらしている原因であると考えることもできるのではないか。わたしはそのように感じている。

このような変化の要因としてまず考えられるのは、インターネットの接続環境の変化が大きいと思われる。かつてのようなダイヤルアップから常時接続が当たり前となり、しかもスマートフォンの利用者がPC利用者を上回るようになった。パソコン通信時代の会議室のやりとり等では、掲示板への書込みに対する返信に１日程度かかることは普通だったし、そのような時間的にも余裕のある中で、書込みの内容もだいぶ吟味した上で議論が行なわれていた。それに対して近年は、メール等の返信も含め、当時に比べて何事もスピードが要求されるようになった。そんな通信環境の変化の中で、ネット空間においてギスギスしたやりとりが目立つようになってきたようにも思うのだ。それに加えて、ひと頃の会議室形式の掲示板（BBS＝ Bulletin Board System）が中心だった頃と違って、Twitterに代表される短文投稿サイトが主流になったこともそこに大きく与っているように思う。2chもそうだが、こちらは長文投稿もそれなりに可能ながら、その大半は短文の言い捨てである。Twitterにしても、直接相手に言わずに、いわゆる空中リプライを多用して中傷的な発言をする人が非常に多く見られるが、当の相手がその発言を目にすることを予想すらしないのだろうか。これではそもそも対話が成り立つわけがないので、その議論が建設的なものになることを期待する方がもともとおかしいのである。短文

*1 一般論としても参考になる Wikipedia 上の方針としては、たとえば「善意にとる」とか「礼儀を忘れない」、「個人攻撃はしない」といった項目がある。

投稿サイトに限らず、こういったことが当たり前に行なわれているところに、非‐対話的なやりとりを指向する現代の傾向が特徴的に表われているようにわたしには見える。時代の変化と言ってしまえばそれまでだが、よりよき対話を望む者としては、そのような昨今の風潮がとても残念に思えてならないのである（時代の変化は何もIT環境の変化にとどまらず、この問題を論じるには、その他さまざまな側面を考慮しなければならないが、紙幅の関係もあって、ここではIT環境の変化に限定して言及した）。

演出家の平田オリザは、ある本の中で、《対話のない社会に、討論（ディベート）だけを持ち込むと、様々な混乱を招く。》[*1] と書いているが、これはわたしも同感である。本頁でいろいろと述べてきたこともこのことに尽きると言ってよいだろう。誤解を恐れずに言えば、今わたしたちに必要なのは、議論のノウハウでもなければ、論理的思考の能力ですらない。わたしたちにいま必要とされているのは対話の姿勢、対話の精神なのである。

苦言や異論に一切耳を傾けず、直ぐに切れてしまうといった心性（メンタリティー）では生産的な議論はもとより不可能だ。Wikipedia上の議論にしても、たしかに炎上もそこそこ多いし、時間ばかりかかって非効率極まりないかもしれない。しかし、効率ばかりを求めて、時間のかかるやりとりを必要以上に嫌う姿勢は、一時的にはよいだろうが、結局は対話の精神を蝕（むしば）むことにつながる。そして、このような時間のかかるやりとりを忌避し、あるいは効率ばかり求める態度が、かえって生産的な議論を生まない要因を育んでいるのではないかとわたしは思うのだ。上でも書いたように、一見非効率とも見える時間のかかるやりとりも決して無意味とばかりは言いきれない。《曖昧さに耐える勇気》（マスロー）を持たず、いや持ちえず、効率だけを求める態度は、やはり対話の精神から遠いと言わざるをえない。くりかえすが、いわゆる効率的なディベートばかりが議論の方法ではない。議論（ディベート）のノウハウ以上に大切なことは、その人が誠意を持って相手とやりとりをする気持ちがあるかどうか、そこに対話の姿勢があるか否か、なのである。

(5-2) 対話の精神について

先に紹介した写真家の橋口譲二は、インドや東京でのワークショップの記録をまとめた本のあとがきで、《写真を撮り、アルバムを作り、展示もするという作業は二次的なことで、**その途中のプロセス、すなわち「対話」にこそ意味がある**のだということを、僕は彼らとの関係の中で知り、学んだ。はじめからそのことを自覚していたわけではなかったが、これまで作家活動の中で培ってきたものが、**途中、すなわち関係の持ち方をはしょってはいけない**ということを、本能的に体が自覚していたのだと思う。》[*2] と述べている。

橋口が言うことにはとても共感できる。わたしが議論や対話のあるべき姿として言いたかったこと、上でくりかえし主張してきたことは、要するにこういうことだったのだ。

---

*1 平田『対話のレッスン』小学館、2001 年 10 月、p.200.

*2 橋口前掲書『対話の教室―あなたは今、どこにいますか？―』p.378　傍点引用者。

わたしは上で、批判もまた対話であるという前提で語ってきたが、批判も議論の形を取るかぎり、それはやはり対話なのである。それは、単なる高率ばかりを優先したロジカル・シンキングやそれを下にしたディベートとは、形は似ているとしても、本来異質なものですらある。そのやりとりがいくら非効率で時間ばかりかかるとしても、わたしたちは決してそのプロセスをおろそかにしてはいけないのだ。

さらに、これも先にも触れた平田オリザは、日本語や対話のあるべき姿について書かれた本の中で、《私は学生たちに演劇を教えるときには、方法ではなく態度を身につけるのだ》と教えているという[*1]。平田は、対話とはお互いに異質なコンテクストを持つ他人同士がその価値観をすりあわせる行為だと言う。そして、《対話とは、他者との異なった価値観の摺り合わせだ。そしてその摺り合わせの過程で、自分の当初の価値観が変わっていくことを潔しとすること、あるいはさらにその変化を喜びにさえ感じることが対話の基本的な態度である。》と述べる[*2]。

この平田の言うことにもわたしは共感を覚える。

わたしもまた、対話ないし議論とは、お互いに違う価値観を持つ者同士が、そのお互いの違いをよく把握し、なおかつお互いに自分の意見をいくらか変化させながら、お互いを理解する（必ずしも同意や納得が目的ではない）やりとりだと思う。そのプロセスに耐えられず、切れてしまう人が多いのは残念だが、賽の河原の石積みにも似たそのプロセスをはしょらずに続けないかぎり、対話（議論）が実りあるものになることは決してないだろう。平田は、対話は「時にお互いが理解し合えないほどに違うこともある」という気づきから始まると言う。対話とはそれだから、それでもなおその相手を理解しようという強い意志とその相手に対する興味があって初めて成り立つ行為であると言えよう。

本章も期せずして長くなってしまったが、ここで最後に橋口の言葉を引いて終わりとしたい。

> 《　人と人が感情をぶつけあう。このことを言葉に置き換えると、「対話」ということになるのではないだろうか？　知力、体力、気力、思い、願い、祈りが折りあい、初めて対話は成立する。》
> （橋口『対話の教室―あなたは今、どこにいますか？―』p.377.）

*1 平田前掲書『対話のレッスン』 p.211.

*2 同書、p.215.